

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第41巻第3号 二〇〇六年二月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリン著・岸本雅之訳

『ポーランド旅行』「レムベルク」

現代の国家は民族の墓穴だ。国家は集団的野獣だ。

田舎風のルブリンから——この都市は壮大な星空で私を迎え、壮大な星のきらめきで見送ってくれた——南方の東部ガリツィア^(二)へ。広大な草原と耕地が現れる。平原が広がるなか、柔らかな車席に一人座っていることの幸せ。穀物はすっかり刈り取られ、積み上げられた干し草が黄緑色の山になっている。白いしつくい壁に黒い切妻屋根の小さな家々が見えてくる。日溜りの中の屋根が緑に苔むした小屋の一群。何と懐かしい光景だろう。梢の高い群れの木が二軒の小さな木の家を守っている。樹間を犬たちが跳ねている。時折風景のなかに湖や沼が加わる。一時間後、列車は密生した広葉樹の森に入る。茶色や黄緑色に生い茂っている。黒っぽい松、下生えの中には若木も見られる。このような大きな森が、松がまばらに生えているだけの区間によって長く途切れながらも、陰鬱な連峰のように、次第に頻繁に現れてくる。まれに現われてくる畑地では——森が開墾されている——草や根や枝が赤い炎となって燃え、青い煙が立ち込めている。列車の走る音が、石の舗装路を馬が疾駆しているかのように聞こえてくる。

景色は謎めいてくる。遙かな道のりを走ってゆくと、あちこちの畑地で赤い炎が上がり、青い煙が漂っている。森の中を童話にでてくるような農家の荷車が行く。樹木の幹を積んでいる。列車の揺れはすごい。右から左へ滑ってはダッシュしながら、まっしぐらに突き進んでゆく。丘、色づいた荒野の草。これをドイツの風景とみなしても、少しもおかしくはない。これはザクセンの田舎だ。私は北方へ、故郷へ向かっているのだ。嬉しさがこみ上げてきて、見覚えのある風景をあかずに、注意深く眺めやる。ああ、何と心地よいことか。帰郷するのだ。私はそうしたいのか。そうだ、帰りたい。まもなくなじみの街を通して自分の部屋に落ち着くのだ。すべてがそっくりそこにある。それは何と混乱した風景だろう。

暮れはじめる。列車の中は暑い。昨日の今頃、氷雨が激しく吹きつけるなか、私はルブリンの街を歩き、ある学

校で、かわいいお喋りな子供たちと一緒に座っていたのだ。そして今、私は一つの幻想をいだく。これは地球だ。地球なのだ。ポーランドやロシア、ドイツの地球がどこにあるというのか。これはまさしく私が育ったのと同じ地球だ。なぜ異国人のように感じる必要があるだろうか。夜になれば、列車に乗ったまま轟音をたてて暗闇の中を走ってゆくだろう。それでもそれは地球なのだ。そして、その時に吹き過ぎる風は、モスクワ、ニューヨーク、ヒンズスタン、そしてベルリンから、縦横無尽に吹く風だ。そして、我々は同じ祖先を持っているのだ。機関車の上げる火の粉が赤々と燃えて、暮れゆく空にうずをまいている。木の葉の緑はすぐ近くでしか見えない。近づいては遠ざかってゆく森は黒い影となり、原野は暗褐色に沈んでゆく。コンパートメントの電灯が窓ガラスにまばゆく映り、いよいよ明るさをましながら、真つ暗な底をもったほの白い空を浮遊している。列車は道路を突っ切り、暗い広大な地平を越えてゆく。あらゆる色彩を、ありとあらゆる色彩を夕暮れが包み込んでしまった。上空はほのかに明るい、どんよりしたにび色が次第に濃くなって外にひろがり、増大してゆく。そのにび色の中を、今度は葉の茂った樹木が黒い列をなして次から次に過ぎ去ってゆき、コンパートメントの窓ガラスに映った電灯がその上をあかかと疾駆してゆく。それから、あたり一帯に灯火、煙突。列車は軋み、唸りを上げる。まぶしいアーク灯、吹きなびく荒々しい機関車の蒸気。軌道の上に木材を積んだ貨車。子供たちが大声を上げている。原野は遠くにへだたってしまった。いつ再び見ることが出来るだろう。こうしている間に、暗闇の中で原野はどうなっているだろう。摩擦音をあげながら列車が停止する。五分間。列車はかすかに動き始め、はずみをつけ、震動し、ゆっくりと進んでゆく。あの風景は、原野はどうなっただろう。窓に映った白熱電球の像は淡黄色に輝いて高い所に君臨している。そして、その下に、背後に、そして外部には、薄黒く広がる不分明な塊がある。

さて、窓に映った電灯はいよいよ明るさを増している。疾走する列車の明かりが幅広く大量に外の原野にこぼ

れ、その上を指で触れるかのように窓の棧の影がかすめてゆく。そして、私が立ち上がって見ると、外には頭と帽子を持った恐ろしい影が浮かび上がる。これが私だ。もう一度。影が外の道路に落ち、橋の欄干を屈折して飛んでゆく。車内の私と外の私。私は自分をはっきりと認め、謎めいた愉快な気分になる。おお、明るい火花よ、きらびやかな。そして漆黒の原野。照明されたコンパートメントの大きな四角形がサーチライトのように側面の闇に襲いかかり、それを一瞬間引き裂きつつ、空と大地のはざまを飽くことなく突進してゆく、——瞬時に掠め去る無気味な極秘の営み。火の粉が水平に飛び過ぎてゆく。外の遠くの方では、心を静めるかのように光が消滅し、重々しく、母親のように豊穡な暗闇が横たわっていて、そこから時折、何かの徴のように、かすかに呼び掛ける声のように、橙色の小さな灯や小屋影が仄見える。五時半だ。私は列車の中に囲われている。ヤロスラフ、まもなくプジェミシルだ。市街は見えなくとも、感ずることはできるだろう。星のように震える、かすかな光の点が都市の美しい前触れだ。

幾つもの都市が漂うように過ぎ去ってゆく。そして網棚も座席のクッションもトランクも、車両の中のもの一切合切が窓に映り、かなたに影を投げながら、真つ暗な地方を運ばれてゆく。鏡のようなこの仕切り壁は軽く透明で、そこに宿した繊細な像を貫いて、火の粉が束となり房となって飛び散るのが見える。列車はひたすらに暗闇の中を疾走してゆく。

そして朝、すっかりくつろいだ気分、今はレギヨノフ通りと呼ばれているレムベルクの大通りを歩く。無言の行も終わった。ドイツ語の新聞を呼び売りしている。日は照っているが、寒さは厳しい。またしてもミツキエヴィッチ記念像を目にする。像の円柱には莊重にも天使がとまっている。冠をつけた天使はずいぶん悲しそうに円

柱を下りようとしている。広い通り、大きく立派な商店、文房具店、帽子店、革製品を扱う店。心はずむ。ルブリンは不潔で、狭苦しく、貧しくてひどかった。ここには実際、迷い、探し求める者にとって格好のショーウィンドーとなる大書店があり、ドイツ語の本をおいている。くだらない作品でさえ私にはうれしい。すぐさま楽譜が目につく。「君に会うと涙がこぼれる」、「青く美しい君の瞳」——また見つけた。ドストエフスキー、ショーといった現代教養の重騎兵連隊が整列している。私は彼らを遠まわりに避けて、青く美しい瞳の方に寄る。この地では、戦前既にポーランド人が支配していた。ガリツィアはいはばポーランドのピエモンツ^(四)だった。オーストリアが据えた総督がポーランド人で、官庁および法廷用語はポーランド語だった。しかしながら、常にオーストリアの影響を強く受けている。

このガリツィアの諸都市は会議王国^(五)ポーランドの都市とはまったく異なっている。人々が温和で親切だ。ワルシャワの人間はロシア風に鍛えられていて、堅苦しかった。あの赤い砂岩の椅子の上に座っているのは誰だろう。「アレクサンデル・フレドロ」^(一)と記念碑に書いてある。評判を聞いてはいるが、よく知らない。彼はずっと昔に亡くなったにちがいない。というのも鋼鉄ペンではなく、鷺鳥の羽根ペンを手に持って書いている。彼がさも作家らしくそこに座わっているのは意味がないように思われる。羽根ペンと名前だけで十分だったと私は思う。彼が今座っている椅子で書いたのではないことは確かだ。しかし、私は椅子については評価したい。椅子は作家にふさわしいもので、サル^(二)の尻尾と同様に作家の器官をなすものだ。もしすべての特性が遺伝するとすれば、作家の子供たちはきつとお尻に尻尾か丸椅子でも付けて生まれてくるにちがいない。ミツキエヴィツチ広場を越えて音楽が鳴り響いてくる。驚くほど非ポーランド的で下手な吹奏だ。丸々と太った指揮者が指揮棒と銀の玉を持って軍隊の前を進み、その後ろにはブラスのドンチャン楽団が続く。そして、一直線に並んだ大都会の個性のない実用本位の建

築。

晩、レギヨノフ通りを歩く。光が満ちあふれ、真昼の明るさだ。街灯は通りからずっと後退して立っており、柱が見えない。おびただしい光の中に電灯の鐘形シェードが大作りにぎっしりと吊り下がっている。その光の下、レギヨノフ通りのこちら側にある、光り輝く華やかなショーウィンドーの前の広い歩道では、人々が群れをなして混雑している。背が高くすらりとしたポーランド人たち。はつらつとした顔、浅黒い顔、流行の仕立ての外套、先のとがった靴。あちらの旧ロシア領ポーランドでは女性たちが上品で魅力的だったが、ここでは男性たちがそうだ。

これらの商店はたいへん良質な紳士用品もたくさん並べている。ご婦人方が通り過ぎる。柔和で、感じがよく、女性らしい、オーストリア的な性格だ。私の目の前を歩いているのは、しかし奇妙なものだ。ロシア人は活動的な女性のタイプを生み出したが、オーストリア人は毛皮を羽織って淑女ぶった、従順な、つまらないペットを生み出した。向こうでは別種の男性がいて、異なった倫理観を持っている。ここでは男性は品をつくって、目配せし、求愛する。おめかしをして、まるで女性のようなのだ。彼らは雄鶏を演じているのだ。ワルシャワでは女性が猫のように足音を忍ばせて歩き回り、野生動物を演じていた。性愛に関しては、もっと張り詰めた空気があり、男性は女性と闘っていた。双方で演じられる喜劇、そして奇妙にずれた現実。自然の創造者としての人間。次元は異なれ、ここでも勝利をおさめた精神。

レギヨノフ通りは押し合いへし合いの混雑だ。長蛇の列が二列、通りの暗い端で伝動ベルトのように折り返している。明るい照明が人々を集め、幅広い人の列がまっすぐに漂い、視線を投げては探り合い、次から次へ食い入るように眺めて、お互いから活力を吸収している。見る喜び、視覚による享受。視線を伝って興奮が流れ込み、相手方へも伝わる。これらの人々はある真に緊張した流れのなかを漂っているのだ。やって来る者は皆、個としての性

格を喪失し、この流れを支えている。

群れたたくさんのユダヤ人たち。黒や茶色のスエードの硬いつばのある帽子をかぶっている。折り目を付けたものもあれば、ただひしゃげただけのものもある。この帽子に皮を巻いた者も何人かいる。この風変わりな帽子がシュトライメルだ。ここを歩くユダヤ人はたいがいヨーロッパ化している。そして大声で自分たちの言語を話している。年配の人たちは手を背中に入り、やや背を丸めて、流れのなかでのろのろ足を引きずっている。時折、何か身振りをしながら立ち止まる者がいるが、先へ押し流される。ここを歩くほとんどすべての人たちがふっくらした顔をしている。

ワルシャワのことを不意に思い出すのはなぜだろう。私はもの悲しくなる。そうだ、私の服を着て、私の靴を履いていて、私があちこち連れまわっている人間という存在とはいかなるものだろうか。それはなんと移ろいやすいものなのだろう。私は人々がひざまずいていたワルシャワの教会を、一人の老女が朝から晩まで教会の前に座っていたヴィルノを思い出す。老女は盲目で、そこに座らされていたのだ。それで彼女は歌を歌っていたが、それは決して拙くはなかった。人々の雑踏の中へ、派手なネッカチーフを巻いた農民たちがやってきて、一人はキーキー鳴く子豚を袋に入れて背負っていたが、誰も彼に注意を払う者はいなかった。それから、歩きながら子供に授乳していた貧しげな女性たち。ここに市場はあるのだろうか。ポーランドで、私はこれまでただじっと観察していただけだった。私は眼であり、耳であり、もの言わぬ背景だった。何かについて判断を下すような気には滅多にならなかった。「これこれのものは気に入りましたか」と聞かれても、どう答えればよいのか分からなかった。そのような質問によって私の内部に生じた空虚さに圧倒されていたのだ。今、ここを歩いている私は答えることができるし、答えない、いや、答えずにはおれないほどだ。これらの完璧なヨーロッパ人や中途半端なヨーロッパ人、恐ろ

しく生彩を欠いたヨーロッパ人もいる。このことについて私は答えずにはおれない。ここにはカフェーがあるだろうか、そして文学にたずさわる人や、タゴールについて語る人がいるだろうか、私ははやくも心配になってきた。そして、それは半時間後に実現する。とあるドアの前に立つと「カフェ・ワルシャワ」とある。一刻も落ち着いていられないのが私の宿命だ。入らずにはおれない。回転ドアのところをずいぶんおめかしした娘たちが立っていて、その隣のカウンターに年配のご婦人が二人座っている。娘の一人が私の上着の襟に手をのばして、四九四という緑の番号をピンで留めてくれる。病人と療養者のための募金です、とドイツ語で言う。私はお金を出しながら、不機嫌に「君たち、自分たちのために集めたらどうなの」と思う。

大きなカフェーだ。おしゃべりしている人々の中央部では音楽を演奏していて、右手の階段が読書室に通じている。やれやれ、来なければよかった。まったく気がのらない。私はなんとも言えず捨て鉢な気になってしまった。このたわいのない饒舌な音楽を私はどうにも好きになれない。今朝だったら、ひよつとすると快く感じたかもしれない。だか、ドアのところでシヨート・カットに赤いブラウスの女の子がいて、興奮してせかせかと、無意味な葉飾りだ。今度は私のテーブルに中年の男女が腰を下ろす。男性のほうは鼻眼鏡を付けて、新聞を読んでいる。女性のほうは耳につけた大きなブリリアント・カットのダイヤを揺すっている。この品物で二二〇ズウォティは安いな、ただ、期限が過ぎてしまっているがな、他でなら二〇〇ズウォティはするよ、と彼は彼女に新聞の記事について話している。ガラスのシェードがついた天井のまばゆい電球は、これらの人間に光りを与え、彼らの団欒を照らしだすために作られた。押し潰された太古の木の堆積である石炭が、人々のために大釜の下に投げ込まれ、燃やされる。その上の水はどうなるだろうか。沸騰し、気化して蒸気となり、膨張する。大きな屋内には回転する発電機があり、なぞに満ちた電気エネルギーを生産する。それは電線に導かれ、一瞬にしてこちらへ、このカフェーに伝

わり、光となる、——何のために？ 誰のために？ ここにいる者のために。——ああ、それは彼らを喜ばせるのだ。これは認めなければならない。彼ら動物としての人間は光の中で行動し、呼吸し、死んでゆく。私は些細なつまらないことを大げさに述べるつもりはない。だが、これは些細なことだろうか。

私のテーブルに相席している鼻眼鏡の男性は新聞を置いて、ダイヤの耳飾りをつけた妻が渡した札束を数えている。楽団はずいぶん古い甘美なウィンナー・ワルツを演奏し始めた。彼らが喜び、感動でうちふるえる姿を見ることができればよいのだが。二人ともさめた顔で座っている。彼はお金に喜びを見せずに、それをまとめて手に取り、懷に入れている。無愛想で、かたくなで、冷淡な、狷介な人物だ。貧しくさげすまれたハシディズムの信奉者たちはなんと誇らかに見えただろう。ワルシャワの暗い中庭の仮庵に座っていたあの男性は、食べ物について、それが精神的なものだと語った。「あんたがたは食べると思っていなさるだろうが、それだけでしょいか。」

残念だが、私はこの人々が好きではない。彼らはくだらない人間だ。私はルブリンの街外れの貧しい人々の側に立つ。ワルシャワの大聖堂で、顔を床に押し当てて、十字架のように横たわっていた農夫の側に立つ。そして、ルブリンで自分たちの大学を創立したカトリックの人々、また、そこから遠からぬバルトフカ通りに、彼らの堡壘ともいえる大学を建てている敬虔な人々の側に立つ。今、二人の女の子が回転ドアのところからやってくる。あのブロンドの娘も白い長いシヨールをおってやってくる。そして彼女が通りすぎる時——揺れるスカートの裾の縁飾り、若々しい小生意気な顔——、私は、彼女の身体の中に神の偉大な無限の生命が流れ、彼女の眼を輝かせていることに気づく。ただ、彼女も他の人たちもこのことをまったく知らないのだ。彼女たちは白と赤の紙札をテーブルからテーブルへ売り歩いている。私は要りません。もうたくさんです。はっきりとお断りします。ウィンナー・ワルツを繰り返し演奏している。私は要らない。客たちはホールでワルツにあわせて歌っている。彼らは精

神を、魂を持っているのだろうか。なんてひどい、情けない世の中だ。

お前、私の内にあつて、繰り返し現われては消えるお前よ、お前はここで何を求めているのだ。この地はお前に少しも相応しくない。お前はなぜ、そんなに道に迷うのだ。ずっと前から、すべてを予感し、分っていたのに、間違えてばかりいる、お前、虐げられた寡黙な自己よ。偉大なこと、神秘に満ちたことについて知っていて、それを絶えず生と死の中に求め続けるお前よ。お前はどこにいるのだ、なぜ閉じこもっているのだ。お前は私が授かり、消えないように両の掌で守らなければならない、仄かな明かりに他ならない。油が紙に染み透るように、お前はいつも私の想念に浸透してゆく。お前は私を叱責するが、十分ではない——今、私は悩んでいるが、十分ではない。お前に詫びなければならぬことがたくさん、たくさんある。

私には涙がない。涙があれば今こそ流れ落ちるだろうに。——

当地のレストランはオーストリア風だ。昼に出されるローストビーフは西欧風で固い。ロシア地域では、食事の時に音楽があつて、まるでお祭り気分だった。こちらでは、腹を満たすことが目的の即物的な食事が行われている。人々はスプーンを手にとって新聞を読み、文芸欄の読み物を食べている。

レギヨノフ通りのユダヤ人にショックを受ける。そこで私は、機敏な張り詰めた表情、探るような視線、そして、そばだてられた地獄耳に気づく——悪徳商法、詐欺師、山師の流儀だ。彼らは大勢群れ集まり、大群をなしている。この通りには戦慄を覚える。それは比類ない闇取引所のように挑発的だ。ここを歩けば、生産を伴わない口先商売がどういうものか、食客や居候という敵意のこもった言葉が何を意味しているかが分かるだろう。この民族に好意的な人でも、ここに立てば、誰も弁護する気にはならないだろう。このような事態が生じ得たということ

は、ユダヤ民族が経済的に恵まれず、非常な逆境にあり、自己とその周囲世界にとって危険な状態にあることを示している。これは何世紀にもわたる為政の帰結だ。人為による肉体的、経済的退廃であり、泥沼だ。指導者たちは彼らをここから救い出す責務を負っている。このユダヤ人通りのおぞましい光景を彼らの脳裡に刻み込まなければならない。そして、彼らをここへ追い込んだ者たちは自らの非を認めるべきだ。

建物の玄関ホールに男たちがいる。二人の男が興奮して睨み合い、身振りをまじえて罵り合っている。側溝のわきを、流行のゲートルをつけ、細い散歩用ステッキを持った一団が歩いている。その中の一人が、他の者たちにはやされて、一人の年配の男を嘲笑して追い払おうとしている。モルタルのいつぱいついたカフタンを着たその男は、身をかめたまま言い返すことができずにいる。ブリストル・ホテルの前に人が集まっている。数人、赤髭の人がいる。

通りをゆくポーランドの聖職者たち。顔つきはほんやりしているが、身体はがっしりと農民風で、温厚だ。貴族や大市民たちは上品な人たちで、小さな口髭を生やし、髪は分け目できれいに撫でつけ、額は広く、鼻筋が通った高貴な顔立ちで、憂鬱さと消極性をたたえた、黒っぽい表情豊かな眼をしている。その他の男たちは、気性が荒かったり、狡猾で、卑しかったり、大柄で不格好で、鈍重だったりする。著しく不機嫌で陰気な者たちもいて、そのつもりではなくても、嘆くような、非難するような眼の動きをしている。一人の聖職者をたびたび見かける。やや年配で、やせており、着古した黒い外套に黒い山高帽子をかぶっている。不信感が強く、疑い深そうに眼をきよろきよろさせている人間嫌いだ。

ひっきりなしに新米兵士が行進している。鉄かぶとをかぶり、銃を肩に斜めにかけている。秋は急速に深まってゆく。雨がよく降る。木々は葉を落としてしまった。

この都市はルテニア大公ダニイロ^(六)の息子にちなんで、ルヴフ、レーヴェンベルク、レムベルク、すなわちレオの山（ライオンの山）と呼ばれる。ダニイロは、タタール人がこの国の略奪をほしきままにしていた一二世紀の人だ。一世紀後、ポーランド王カジミールが城塞を占領し、破壊して、近くに現在のレムベルクを建設した。市はすっかりポーランド風になり、諸民族の中心地となった。通りを歩けば、それが分かる。大きなルィネク広場の近くにはロシア人通りがあり、アルメニア人通りがある。壮麗な市役所が真ん中に立つ美しい広場に接して、古い立派な建物が連なるなかには、ヴェニス公使の建物もある。この都市は東西の狭間における集散地であり、積替え地だった。スペイン系ユダヤ人であるセファルディームが南方からやってきて定住した。その後、ドイツの開拓民やその他の民族が、商品と利潤を追いかけて、これに続いた。ロシア人通りの行き当りにはワラキアの教会がある。この都市には今日なお大司教が三人いる。一人はアルメニア大司教で、この方は非常に貧しく、ポーランドに定住したアルメニア人子孫の裕福な地主たちの援助をうけている。それからローマ・カトリック教会大司教と並んでもう一人、ルテニア人もしくはウクライナ人たちのギリシャ・カトリック教会大司教がいる。これは一言では言い難い問題だ。この病身の^(七)大司教は、本人自身はそれほど政治的ではないのだが、何年か前にアメリカへ行き、反ポーランド活動をしたということだ。二年ほど前、彼が帰ってきた時——レムベルクを目指したのだが——、彼の車両はワルシャワに送られた。彼はヴァチカンの教皇庁と交渉の末、忠誠宣誓書に署名しなければならなかった。

カジミール大王はダニイロの城塞を破壊し、このレムベルクを新たに建設した。しかし、ウクライナ人はレムベルクがポーランドのものだという現実を承認しない。ウクライナ民族はロシアとポーランドの狭間で引き裂かれていて、平穏を見いだせないでいる。当市の人たちと話してみても、密かな、しかし恐ろしく熾烈な民族闘争が繰り返

広げられているという印象を受ける。当市にはウクライナ語の新聞がある。その一つがルィネク広場で発行されている。たまたまロシア文字が使われた新聞のある号を手に取り、——ロシア文字は古代ギリシャ語に由来するもので、私はそのほとんどが分かる。ロシア文字の背後には古ビザンティンがあり、その文字のひとつひとつがコンスタンチノープルを想起させずにはおかない——、新聞を見ると、一つの欄がまるまる——何も載っていない。論説の箇所が白いままだ。戦時同様に検閲が行われているのだ。空白の欄、これは大変なことを物語っている。何人かの人と話してみると、彼らはドイツとドイツ的なものに対して非常に好意を持っている。しかしポーランドに対しては多くの人の口から、陰にこもった、盲目的な、恐るべき憎悪が、まったく衝動的な憎悪がほとばしりでてくる。一般の人たちはむしろ冷静に、ポーランド人がよそ者だという感情を持っているように思われるが、知識人たちの間では、被抑圧民族との思いがあり、文化的手段により民族感情を目覚めさせようと努めているのだ。私は彼らの話を一つも確認することができない。少し前、レギヨノフ通りでポーランド^(八)国家元首の暗殺が企てられ、一人のユダヤ人が逮捕された。ウクライナ人たちは、それが彼らウクライナ人の一人だったと主張している。彼らは厳しい扱いを受け、密かに、或いは公然と、ポーランドに反抗しているのだと私は思う。彼らの多くは獄につながれ、優れた指導者たちは亡命しているという。私が会ったウクライナ人の多くは、穏やかで鈍重な男性たちで、彫りの深い無表情な顔をしており、黒い瞳となめらかな黒髪をもっている。その他に顔一面に褐色の髯を生やした人たちもいる。彼らは農民風の実直な印象を与え、性格は控えめだ。レムベルクは活発な西欧的近代的中都市で、その街角は平和と活況を呈している。けれども、私はそこで不意に、異様な現実に直面させられる。ここには、互いにこの都市を争う二つの敵対勢力があり、陰に隠れて敵意と暴力がうごめいているのだ。東ガリツィア地方の田舎にはほとんどポーランド人が入っていないそうだ。役人と軍人はポーランド人、庶民はウクライナ人で、都市と村

にはユダヤ人もいる。ポーランドは兵士や傷痍軍人などポーランド人入植者を地方へ配置している。彼らがポーランド化を進めるように、というわけだ。しかし彼らの数は多くなく、異郷で不運をかこっている。それから、ポーランド人がレムベルクにウクライナ人を望まないのは、ウクライナ人がこの都市に殺到することを恐れのことだという。いずれにしても、ウクライナ人が考えているように、レムベルクへの過度の集中という事態が生じるだろう。それは密か、かつ公然の戦争で、かつてのイギリスに対するアイルランドの戦争よりも性質が悪い。なぜならば、ここでは国土も民族も境界線で分けることができず、それらが重なり合い、入り混じっているから。おまけに、ウクライナ人の民族意識の高揚は闘争の中で、今まさに始まったところだ。そしてポーランド人は、ウクライナ人を激怒させ悲しませることだが、これを抑制し、あるいは否定しようとさえしている。

ウクライナ人は既にオーストリア支配の時代にポーランドと戦った。一九一一年、オーストリア総督のポトツキ伯爵が当市で殺害された。墨壁のような高台の木立の中にある古い総督邸を見せてもらおう。ポトツキは死ぬ時、ゴールデン・フリース勲章をつけていた。ウクライナ人学生が捕らえられた。しかしポトツキの後任者は抜け目がなく、その学生を逃亡させるよう示唆した。彼は今もアメリカで生きている。アイルランド人同様に、ウクライナ人はアメリカのお金を頼りにしているという話だ。

大戦末期、^(二〇) 彼らは九ヶ月にわたりポーランドと戦ったが、無駄だった。その後、講和会議によりポーランドは、独立したこの国の統治を暫定的に認められ、後に住民自身による決定を行うことになっていた。しかしながら、この国民選挙は行われなかった。一九二三年、大使級会議は東ガリツィアをあつさりとしてポーランドに与えてしまったのだ。レムベルクを含めて東ガリツィアの幾つかの州に一定の枠内で自治を認める、というポーランドの法律がある。しかしこの法律さえも、紙に書かれただけのものにすぎない、と彼らはこぼす。——ワルシャワで肘掛椅子に

座っていた病身の編集者の警告が思い出される。「少数民族の言うことを聞いてはいけません。彼らは何にでもけちをつけるのです。」

ワルシャワで非常に分別のある聡明なポーランド人政治家から聞いたことが思い出される。彼は手を机の上において、頭をふった。「日常の要請や議会での演説があります。自治や重大な事柄と同じようにこれらのことがあるのです。でも、地元では事情は異なります。道をつくらなければなりませんし、湿地を改良しなければなりません。」今、私は「地元」にいる。そして、彼らが議会で主張することと同じことを聞かされているのだ。ロシア人がワルシャワにいてポーランド人を支配していた時、これと同じような言い草をしたのではないかと思う。「鉄道を建設しなければならぬ。ポーランドがこれ以上荒廃するのを阻止しなければならぬ。」占領、それは抑圧され、自国にいながら、異国にいるように生きなければならぬことに他ならないように思われる、——この街を歩き回っていると、それが痛いほど感じられる——これほどにやりきれないことはない。自由こそがあらゆるものの中で最も必要な「日常」なのだ。自由は政治的美辞麗句ではなく、我々が生きるために必要な空気と同じように現実的で必要なもので、幹線道路や干拓された湿地よりも重要なのだ。奴隷となった人々、そのように感じる人々は息も絶え絶えの瀕死の人々だ。彼らに幹線道路は何の役にも立たない。

これらのことすべてを、ポーランド人は彼ら自身の歴史から知っている。知っているのだが、それを細大漏らさず知らされてはいないのだ、と私は思わざるをえない。

ウクライナ国立博物館がモフナツキ通りにある。前庭のある簡素な建物だ。ギリシャ・カトリック教会の大司教が戦前に寄贈したもので、宗教的芸術作品をたくさん所蔵している。聖画像、祭服、教会の燭台。木の板に描かれ

た最後の審判の絵には多数の無垢の人々が描かれている。古代スラブの聖書。金地に素晴らしく愛らしい女性や厳しい表情の女性たちを描いたアイコン。聖人たちの顔は類型的で、大きな死んだような目をしている。豊かな色彩のフツリフツリの木製の燭台が天井に吊り下がっている。非常に古いキリムがある。この絨緞を織る技術はポーランドのものですか。いや、タタール人と共に東方から伝わったものです。ロシアとウクライナの古い絵画の違いを説明してくれるのだが、私にはそれが判らない。というのか、それほど大きな違いではないように思われる。ロシア的なものはより細部にこだわり、ウクライナ的なものはよりシンプルであるというのだが、ウクライナ人はロシア人とも一線を画したいのだろう、と私は理解する。これら古代宗教画はたいてい木の板に描かれたテンペラ画だ。これらに加えて、版画、擬古主義的特長をもった切紙絵、穏やかなタトラの風景画等、現代ウクライナ絵画のささやかな展示がおこなわれている。

オーストリア時代からこの都市には公立のウクライナ人ギムナジウムがある。しかし、思いは常にレムベルクにおけるウクライナ人大学の創設にある。ウクライナ人たちは先例を作らないように、彼らの息子たちをレムベルクの大学では学ばせない。当市には非合法のウクライナ人大学があったのだが、迫害を受けて解体してしまった。亡命者たちが滞在しているプラハに一つあったが、今はもうない。クラクフでポーランド人大学にウクライナ人を附設する計画があった。これは、自分たちを支えてくれる民衆から引き離される思いがするのだろうか、ウクライナ人たちが望まなかった。また、亡命しているウクライナ人教授たちも拒否した。ジュネーブでポーランドの外務大臣が当市に大学をつくることを約束した時には、彼は議事録からこの箇所を削除させなければならなかった。レムベルクでポーランド人の抗議集会が開かれそうになったのだ。このように二つの民族は互いに融和することなく対立を続けている。

田舎へ行き、これらウクライナの人々やその子供たちを見る。人類学的類型に富んだ、並外れてたくましい種族だ。家族はたくさんの子供をかかえている。多数の小規模農場と無産化の傾向。田舎は彼らが押さえている。スタニスラフ、コロメア、ドロフビチといった幾つかの都市でも、彼らはポーランド人やユダヤ人に対して多数派だ。ポーランド人はもっぱら大農地を所有している。彼らは通常自分では農地を耕さずに、賃貸しているが、この借地契約は現在徐々に廃止されているそうだ。ウクライナ人の知識人の割合は少ないが、農家の子弟が教育を求める傾向は強い。彼らの聖職者たちは社会的急進派で政治的には民族主義だ。そして、かつてポーランド人の場合がそうであったように、政治活動の前衛だ。「あなたたちの宗教は何？」ギリシヤ・カトリック教会だ。儀式にはロシア人と同じようにギリシヤ語を用い、ミサと歌には古スラブ語、説教にはウクライナ語を用いている。そしてローマ教皇の権威を認め、カトリックの教義に従っている。彼らは民族の自立を願うがゆえに、彼ら自身の学校制度を求めて奮闘している。西欧人は、学校がまさに民族の器官として形成されるような、民族の初期段階を、なかなか親身になって考えることができないのだ。

ある小都市の私立のウクライナ語中等学校を訪ねる。クラスは七クラスあり、生徒は二三〇人で、女子の割合は少ない。「あなた方が子供たちをウクライナ人として教育するために、模範としているのは誰ですか。」教師たちが挙げたのは、——ポーランド人と違って彼らはドイツ語を驚くほど上手に話し、ドイツの事情によく通じている——十八世紀末の物語作家コトリアレフスキー、抒情詩人タラス・シェフチェンコ、博学者イワン・フランコだ。ポーランド語とポーランド史のほかに、——現在のポーランド大統領の写真が壁にかかっている——民族意識覚醒のために、彼らは民族史を教えている。「州教育連盟」が東ガリツィア全域に組織されている。

小ロシア、ウクライナの珍しい種族、山岳民族のフツリ族がガリツィア南東部の片隅に生きている。天氣が悪

く、そこへ行くかどうか決めかねている。ここ東ガリツィアの中央部にあるレムベルクでは、フツリの人々について多くのことを私に伝え、教えてくれる。彼らの作り出すものは非常に希少価値がある。収集された膨大な資料を私は後にレムベルクのジェドゥシツキ博物館で、そして、ウクライナ博物館でも幾らかを目にする。レムベルクのある個人収集家も、根っからの好人物で、収集したたくさん素晴らしい作品を私に見せてくれる。フツリの作品には陶磁器、武器、楽器、木彫、刺繍、織物、家具、玩具がある。この山岳民族は信じられないほど器用な手と、独特の形式感覚を具えている。彼らの風習にはいわゆる「異教的なもの」がたくさんあるという。切紙絵やイースターの卵の彩色における独創性は驚くべきものだ。戦争は彼らに多くの変化をもたせた。彼らは現代文明に触れることになり、その独自性は薄れつつある。

無器用で生真面目な、この波乱に満ちたウクライナ人の一人と一緒に、ゆつくりと散歩する。彼は語る。「私の民族には悪運がつきまっています。地味豊かな土壌が一番よくないのです。それはあまりに多くを与えすぎます……格闘することを強いられる、北方のやせた困難な土地は、もっとせつがちで、思い切りがよく、意志が強い、たくましい人間を生み出します。」一方に土に向かおうとする人々がいて、他方には土から離れようとする人々がいる。

ウクライナにはきわめて独特な美しい教会がある。ドロフビチで二つの教会を見る。ひとつはかなり小さく、もうひとつは数百年の歴史があるということだ。後者の教会については、おそらく石油に対するお返しとして、南ウクライナから、解体され、馬車に積まれて運ばれてきたという話が伝わっている。これは市の南部のまったくの郊外にあり、黒褐色の並外れて美しい木造建築だ。アメリカ人がこの建物をそっくり買ったがつているという人々の話しもうなずける。

玉ねぎ状の丸屋根をもった塔が三つ突き出ている。すべて木を曲げて造ったものだ。これらの塔と平らな屋根は仏塔のような印象を与える。下の方には木の回廊がめぐり、全体が緑色がかった木の瓦で葺かれている。そばには玉ねぎ状の尖端をもつ鐘塔が離れて立っている。小さい方の教会には至聖所と会衆席を隔てる仕切り、イコノスタシスがあり、使徒やキリストの受難の絵ですっかりおおわれている。納屋のような堂内にはベンチがない。みすばらしい壁にたくさんの十字架と蠟燭がかけられている。

東ガリツィアはポーランドが掌握しており、ウクライナ民族は引き裂かれたと感じている。イレデンタ（未回収地）は手の届くところにある。全ウクライナをポーランドに併合して、この問題を解決しようとしたピウスツキの計画は失敗した。今、国境の向こう側のロシアにも、民族の補完を声高に叫ぶトルソーのようなウクライナ・ソビエト共和国がある。私が話をしたウクライナ人たちは彼らの母国を望んでいる。しかし、「向こう側にある私たちの国はソビエト・ロシアの掌中にあります。ウクライナ人はこちらでも向こうでも抑圧されているのです。ボリシェヴィキたちも国の自治行政を認めてはくれません。」向こうでは「プロレタリア民族」が出現した。経済の時代はこの民族を——これは新しいタイプの民族だ——他のタイプの民族を横断する形で広めた。

ポーランドはウクライナ人、白ロシア人、リトアニア人そしてドイツ人を同化吸収することはできないだろう。それは彼らの力に余ることだ。アメリカは開かれていて、それができる。大勢の人がたやすく入国できるし、そこに存在する文明は偉大で羨望に値する。この国ではだいたいのところ、地方の住人は文盲といえるほどに無教育で、都市における教育は貧弱で、民族教育が過度に重視され、厳格なカトリックが特に強い勢力を持っている。

学校を見学し、話を聞いて、気が滅入ってしまった。子供たちはウクライナの歴史を学んでいる。私はこれまで、ユダヤ人学校でユダヤ史を、ポーランド人学校でポーランド史を、そしてドイツ人学校でドイツ史を学ぶのを見てきた。現今、民族問題に関しては戦慄すべきものがある。私は民族の自由を擁護したり、「国境」で宥めたり、脅したりする意欲をすっかりなくしてしまった。国境は専制的支配力を持っており、そこに私は民族主義の横暴を見る。ウクライナ人、ユダヤ人、白ロシア人、あるいはその他の子供たちが、今学校で学んでいるが、彼らの民族は引き裂かれていて、望むような発展は阻まれている。今ではなすことすべてが的外れで誤りだ。彼らは閉じこもっているが、精神的には興奮状態にある。そして、いよいよ頑迷になってゆく。ひとつの不幸から恐るべき災いが生じ、幾多の災厄が生じている。そこにあるのは自由ではなく、情熱と戦いだ。なんと多数の小さな言語。そして歴史。私は「歴史」がどのように教えられているか、知っている。そこでは誇大妄想が無知と結び合わされるのだ。私は「自由」がどのように教えられているか、知っている。隣国に対する憎悪をもって教えられるのだ。民族意識とは民族的失心状態にほかならない。しかし、「民族」、「国家」を問わない宗教がまだあり、別の共同体を持っている。これらすべての民族は質の悪い誇張と身勝手な見解に立つて、まったくの盲目となり、同じような西欧的価値を追求している。しかし、民族の他にもまだ別の共同体があるのだ。それらを私は忘れたくないし、忘れることはないだろう。民族共同体と呼ばれるものをよく吟味もせずに、あらゆるものの上に据えるということ、は、厚かましい不遜だ。人々が説く自由は、いかに説くのか、その説き方によって、同じように重要な他の自由に敵対する。私は民族を民族それ自体のためには好きになれない。血液の良くない肉体に何ができるだろうか。

民族が多くのものによって分断されていること、それらを分断するものが別の有力な共同体であることから、目をそらせてはならない。私はベルリンの通りを労働者大衆が行進するのを目にした。彼らがかざした旗印は鎌とハ

ンマーで、ソビエト・ロシアの徴だった。彼らのすべての憧れ、郷土愛、愛国心は——ソビエト・ロシアに向けられていた。この数十年間、知識人たちにとってギリシャが精神の国であり、彼らの本来の、真の故郷として光輝を放っていた。それではキリスト教徒にとっての本当の故郷とは、何だろうか。

ひどい圧制が支配し、正義が行われない国、一方の人々が他方の人々を支配の対象としてしか見ないような国に對して、明日といわず今日のうちにも背を向けなくて、夢中になる人がいるだろうか——我々はそれを表明するよう強いられている。我々が民族とその国土を愛するのはその価値ゆえだ。西欧や東欧の政府がその臣民である民衆に愛国心を要求するのは野蛮だ。現代の国家は偶然の所産にすぎず、合目的にできたものではない。そんなものに誰が夢中になるだろうか。我々は機械が役に立たなくなれば、それを壊して、新しいものを作る。現代の国家は民族の墓穴だ。

ポーランドはこのような国家の建設を目指していたのだろうか。そうではない。彼らの仲間ばらばらの状態だったが、ひとつの民族だった。互いを愛し、求め合った。彼らは自分たちや両親、祖父母に誇りを持っていた。彼らは人間誰もがするように、彼らの思いを、自負心を打ち明けたいと願った。心の底から国家を求めた。今、彼らは国家を持っている。だが、それは彼らの民族性の中に毒を持ち込んでいる。国境が彼らに反撃を加えているのだ。彼らは一線を超えてしまった。丁度、権力を握った瞬間に、革命家が暴君になるように。彼らが抑圧されていた間も、人々の生活が続いていたこと、国境の向うで、あらゆる方面で、そしてかれらの間にあっても、諸民族が暮らし、生き続けていることが、彼らには分かっているのだ。ばらばらに散らばったそれらの民衆はひとつの民族であり、互いを愛していて、自らに誇りを持ち、誰もがするように思いを打ち明けようとして、互いを求めているのだ。飽くことなく拡張を目指そうとするこの巨大な国家とは、何と情けない発明であることか。

原始時代の幻影がここに、そして至るところに生きつづけている。野獣に対する絶え間のない戦いの時代は途方もなく長く続き、いまなお遠い過去のことではない。これらの時代の本能はまだ現存している。しかし、野獣はいない。そこで本能は別のやり方で暴れまわり、野獣を創り出す。集合的感情と野獣への恐怖が絶え間のない葛藤をもたらせている。昔、必要だったものは、当今では幻影、幻覚なのだ。我々は野獣への集合的恐怖の時代にいる。国家とは集合的野獣だ。

しかし、現今のことを考えるならば、ポーランドは確かに非常に困難な状況にある。一世紀にわたり隷属を強いられたが、連帯感がポーランドを支えた。今、民族問題についてポーランドは——無理からぬことだが——過敏に反応している。事故に遭った人が驚愕神経症をわずらうのとまったく同じことだ。だが、少数民族、経済的惨状、隣接する強国に苦しむポーランドこそ、安定化のために、賢明な現代的解決策を見つけないならならぬ。それ以外に安定化の道はない。

歴史的記憶はややもすれば妄想になりかねない。ヨーロッパの国は皆、幾多の危機的記憶を持っている。ポーランドはおそろしく多い。しかしポーランドの隣国も同じように記憶を持っているのだ。——同盟が良いのだが、地理学のほうがもっと良い。ロシアが隣国だ。今日よりも緩やかで好ましい形で、諸民族の自然な共生の道がこの地で拓かれるにちがいない。

レムベルクの市街へ戻る。そこで私はポーランド・ウクライナ戦争の石の証人を見つける。それは——ユダヤ人街の崩れ落ちた建物のことだ。一九一八年、中欧同盟諸国が大崩壊した時、ウクライナ軍が進入してきて、ウクライナの独立を宣言した。そしてレムベルクの市庁舎に青と白の旗がひるがえった。彼らは東ガリツィアからオデッ

サにいたるまでの連合を望んだ。独裁者はペトルシェーヴィチだつた。^(二三)ウクライナ軍はレムベルク中を駆け回り、車を取り回した。けれども駅とギムナジウムではポーランド人が陣地を構えた。初めは少人数だつたが、その後増員し、結局、ポーランド人が中央郵便局までの市の半分を押さえ、ウクライナ軍は残る半分を押さえた。その時、ウクライナ軍は監獄を開いた。ポーランド人受刑者たちはポーランド側に付き、武器を取った。ウクライナ軍は敗れ、ポーランド軍が進出した。

狭いコペルニクス通り沿いに行くと、郵便局の建物が見える。古い建物の廃墟跡に新たに建てられた巨大な近代的建築で、ちょうど移転の最中だ。ウクライナ軍が撤退した後、この戦闘を世にしらしめることになったレムベルクのユダヤ人街へのポーランド軍の攻撃が起こった。十一月半ば過ぎのことだつた。レムベルクのポグロムではユダヤ人約七〇名の殺害、掠奪、多数のユダヤ人家屋への放火が平行して行われた。ユダヤ人たちはこの戦争の当事者ではなく、ウクライナとポーランドの争いに中立を守った。恐らく、どちらかに与することは適切でないとの考えからだろう、彼らは終始引きこもっていたということだ。まさにそれゆえに、ポーランド軍とウクライナ軍の両陣営において、彼らに関して、警戒心を呼び起こすような、臆病で悪意ある噂が広められたのだろう。そして、ポーランド軍が勝者として残った時、市民たちは軍にさらに悪意ある告げ口をしたのだつた。戦争中のことだつた。ポーランド軍は、敵側についた市民に対して軍隊がたびたび行なってきたように、攻撃を加えたのだつた。この時のポーランド軍のように、寄せ集めでしつかりと統率が取れていない軍隊は、常にやられたことに対する復讐心と、掠奪への傾向をその本性に持っている。市の住民がこれに加わった。死者の群れがユダヤ人墓地に眠っており、彼らの墓を見ることができる。しかし、街中にも、別の記念碑を見ることができる。かつてこれほどに恐ろしく、人を憤慨させるものは建てられたことはなかった。灰燼に帰した家屋のことだ。それらは今も、劫火と掠奪が

荒れ狂った当時と同じように立っている。レムベルクには消防隊がある。火事があつた時、消防隊はどこにいたのか、住民に尋ねてみる。

「私はレギヨノフ通りで、劇場の向こう側が燃えているのを見て、劇場の方へ向かいました。そこに消防隊の団がいました。さらに向うの市場のところで建物が一棟、赤々と炎につつまれていました。火炎は建物の中で燃え上がり、窓から噴き出していました。まるで芝居で書割が煙とともに後ろ側から照らされているように見えしました。その時はもう掠奪が行われたことが分かりました。私はマリア広場の北側で鉄道職員に出会ったのですが、それは毛皮のコートを三つ持っていたのです。そいつは一組の男女に出くわすと、彼らに二つをやりました。もう一人やってくると、そいつはその男にも三つ目をやって、新しいのを取りに行くと言いました。さて、劇場の向こう側で火の手が上がっていた時、私は、向こうで火事があるのに、消防隊がこちらにいることに驚き、事態が理解できませんでした。ようやく数人の消防隊員と話してみますと、彼らが言うには、『そうさ、消しに行きたいのはやまやまなんだが、できないんだ。だめなんだよ。向こうの奴らは武器を持っていて近づくどぶっ放すんだ。どうすればよいのか。消防隊がこれ以上近づくと、命の保障がないんだ。』それは残酷非道な自然状態が支配する戦争だった。

たくさんの人でごった返すレギヨノフ通り。この午後遅く、通りの中央にある広い立派な遊歩道に目を向ける。並木の間にばかりかい騎兵像がそびえ立っている。

この記念像と丸屋根のある劇場の建物のおかげで遊歩道はまるで王宮の観を呈している。遊歩道の木陰のひとつでしばらく憩う。木はたくさん黄葉をつけている。それらは枯れて、しおれ、丸まっていて、葉柄にすがって風に翻っている。風は強くはなく、まだ葉を散らすことができないでいる。黄葉は、今度は風になびいて向きを変え

る。ちらちら、手招きし、旋回し、ばたばたして、小さい葉柄をぐいぐい引いている。時折、絶え果てて、静かに地面に落ち着くものがある。空をカラスのものすごい大群がやってくる。何千羽もの啼き叫ぶ鳥が上空から現われ、幾つもの群れに分かれ、幾重にも輪を描いては、らせん状に舞い上がってゆく。時折見えなくなるが、また遊歩道の上で渦を巻く。上空は真つ黒になり、鳥どもはすさまじい叫び声をあげる。それらが巨大な群れになって飛来してくると、害獣のような気になる。それほどびつしりと群れ、不安を覚えるほどに近づいてくるのだ。一羽が群れから離れて、さらに接近してきても、カラスとは見えない。暮れかかる空から大きな羽音とともに舞い降り、すぐさま群れの中へ消えてゆく、この翼を広げた黒い生き物は、薄気味悪い獣だ。活発に動き回り、接近しては人に襲いかかる、危険きわまりない獣だ。誰が私のところに送ってよこしたのか。今度は、数百羽が並んで漂うように飛んでいる。その黒い身体は透けて見えるゼラチンの中に浮かんでいるようだ。そしてたくさんの群れになって舞い降りては舞い上がってゆく。遊歩道で空を見上げている人はほとんどいない。

劇場を通りすぎると、右手に市場がある。そこから一九一八年の戦闘と狂乱の恐るべき記念碑に近づいてゆく。立派に舗装されて手入れが行き届き、瀟洒な商店、記念像、自動車、電気アーケ灯、ホテルが集まるレギヨノフ通りを過ぎ、市立劇場を過ぎたところから、ぬかるみが始まっている。長靴が泥まみれだ。商人、小売商人、零細小売商人、のらくら者、浮浪者がうじゃうじゃしている、これがユダヤ人街だ。クラクフ広場は拡張され、木の掘って建て小屋がいっぱい建っている。広場の右手は大きなアーチ型窓を持つ白い立派な邸宅が占めている。入り口へは階段が通じている。そして、その向かいが最初の廃墟だ。煉瓦造りの二階建ての建物の隣に、崩れ落ち荒廃と化した建物がある。火事かあるいはその他の力によって破壊され、赤い基礎壁を残すのみで、その間にモルタルや瓦礫が積もっている。その隣の建物は上階部分が崩れているが、一階にはまだ店が入っている。難を免れた建物が二つ

続いて、また上階が滅茶苦茶になったひどい建物がある。幾つかの建物は、倒壊を防ぐために、頑丈な桁材を側面にあてて支えている。間口の狭い三階建の建物の前を通りかかる。内部はすっかり焼け落ちてしまっている。六年前のことだ。正面には亀裂が走り、ガラスの碎け散った窓が潰れた眼のようだ。これらすべてが野ざらしで朽ちるままに放置されている。所有者は損害賠償を受けられないでいる。そのため彼らは撤去のためのお金を出さない。

——それに建てることができないのに、撤去しても意味が無い。市場が立つ広場には幾つかゴミが散らかされた不潔な路地が通じている。それらの路地に立つ古くて、陰気な、みすばらしい家々には、人々がびつしりと寄り集まって住んでいる。だがそこにもまた荒れ果てた家屋がある。ガラスが碎けて飛び散り、そこから色付きの壁紙の切れ端や、板張りの床、天井の残骸をのぞかせている。傾きかけた廃墟がある。黒い堆積をのせた氷河のように自然作用によって傾斜しているのだ。それは建物がひと連なりに建っていたものだ。それらの廃墟の前には露店が並んでいる。ワルシャワにもあったスモチャ通りがある。通りの両側には火災にあった廃墟が今にも崩れ落ちそうになっている。大きな廃墟に——それは大邸宅だったのだ——雑な囲いがしてある。虚ろになったそれらの部屋は、通りの方へ内部をさらしている。しかし、一箇所囲いが破られていて、覗いて見ると、袋を背負った乞食たちが子供たちと一緒に入り込み、瓦礫の山に登って、棒切れで物色している。六年過ぎても、いまだに物色しているのだ。紙屑や瓦礫が山から転がり落ちていく。ぽつりと一軒家が残っている。それから二つの街角、つまり、かつてそうだった街角が向かい合っている。それらは家屋内のものをさらけだして、ぞつとするような醜い廃墟の山になっている。家屋の角は足首の高さにまで破壊されている。道路で隔てられた向かいには、爆撃が猛り狂ったかのような恐ろしい陥没がある。囲いもなく、つい先ほど爆弾が命中したかのように、大量の泥や瓦礫、塵埃が道路に飛び散っている。開かれた家屋の墓穴とも言うべきこの建物は、この境界のごみバケツになっていて、女や子ども

もたちがやってきて、塵芥をぶちまけている。市場のたつ広場に立つ。ボスニカ通り、——瓦礫の山、瓦礫の山。あちこちをユダヤ人が行き交っている。ヨーロッパ風の服装をした者たちや、黒い上着を着て、鬚髪を大きな房にして垂らし、顎を出して、髯面の顔を自信たつぷりに前へ突き出し、腰にベルトをしめた、一風変わったタイプの者たち。

このようにしてレムベルクには三つの民族が相共に、一緒に生活している。ポーランド人は注意深く、活発で、この都市を支配している占有者だ、——ユダヤ人は物思いに耽つてぼんやりしていたり、猜疑心が強く、反抗的であつたり、生きること目覚めて活発だつたり、様々だ、——ウクライナ人は、どこへ行つても目立たず、声を出さずに控え目だが、短気で、危険で、嘆き悲しみ、反逆者や反乱者の緊張感を漂わせている。

この都市の住民二五万人のうち、八万人がユダヤ人だ。「なぜ彼らはイディッシュ語ではなくポーランド語を話しているのですか。なぜユダヤ人の新聞はポーランド語を使っているのですか。」——「非常にポーランド的なのです。彼らは小さい時からポーランド語を教わっています。イディッシュ語の文化的重要性を信じていないのです。ヘブライ語は話しません。だから、ユダヤ人の知識人たちや上層階級はポーランド語を使うのです。」

近代ユダヤ人学校協会というのがある。この地方の学校の特徴的なタイプとして、一般科目でポーランド語を用い、ユダヤ史とユダヤ文学ではヘブライ語を用いる、両形色論的な学校がある。この方式の学校に男子ギムナジウム二校と女子ギムナジウム一校があり、五年前から認可されている。純粋なヘブライ語学校が一校あるが、未認可だ。

一九一八年のポグロムは過度の同化に歯止めをかけた。その時、指導権を握ったのはシオニストだ。シオニズムはユダヤ民族主義とは異なる、と人々は念を押す。このシオニストたちがいて団体を作っており、国会での防衛の

ため彼らが選出されている。正統派はまだ、ロシア領ポーランドにおけるようには組織化されておらず、経済的にも弱い。当地には非常に多数の無産階級がいるが、彼らははっきりした目的も持たずに「横町へ」出てゆく。

小さなユダヤ人のホテルをのぞいてみる。給仕か何か、そのような者が盆に珈琲と水をのせて運んでいる。彼はオーナーと思われる男性のところへ行き、何か尋ねて、盆を指し示している。男性はポケットに手を入れて鍵を二つと、次にハンカチを取り出した。それから、さらに深く手をつ込み、ポケットの底から砂糖を探し出して、給仕に二個渡している。

聞いた話では、ユダヤ人街にはいまだに、「新しい街」に出たことがないユダヤ人たちがいるという。奇妙な馬車に足を止められる。赤髭のユダヤ人が手綱を取っているのだが、後を向いて、反対側の端に座っている巨漢のユダヤ人と喧嘩しているのだ。二人の間には茶色の帽子をかぶった農婦が無邪気な顔で黙って座っている。私は、この市で見かける人たちは、他所よりも知的で上品な顔をしている人が多いという印象を受ける。ユダヤ人たちの間を袋を持った農夫たちがまわり歩いて、売り買いをしている。女性たちは離れたところにある車の中で座っている。

再びこの民の礼拝所を訪れる。大きな「教会堂」に行こう思ったのだが、市場のたつ広場の裏通りで、質素な白いしつくい建物に行き当る。出入り口に一人、礼拝用肩衣を掛けた男が立っている。階段を数段下りると、ベンチが並んだ方形の大きな広間があり、帽子をかぶった男たちでいっぱいだ。礼拝用肩衣を掛けている人もいれば、掛けていない人もいる。すぐく甲高い男声がトレモロでヘブライ語の歌を歌っている。中央にビマーがある。帽子やシュトライメルが格子の鉄棒に掛けてあり、室内にはせわしない動きがある。少年たちがビマーの階段を小走りで上がり降りしている。壁には等間隔に配置された絵画が掛かっている。風景画だ。聖書を手に、祈りながら出入

り口のところまで移動している老人がいる。彼はそこで人と会って、挨拶を交わし、ぼろぼろの聖書を手に、ぶつぶつ言いながら引き返してゆく。その間もビマーの上では歌が進行し、やがて止んでは、まったく不意に、再び歌い始める。小さな格子窓の向こう側が婦人席のようだが、女性の姿は見えない。この横丁には他にもたくさん礼拝所がある。角のところで不思議な光景を目にする。ぬかるんだ道を、裾の長い、あまり清潔とはいえない黒の外套に黒のキツパをかぶった、十歳から十二歳の少年が三人やってくるのだ。青白く、ふつくらとした美しい少年の顔と、黒と褐色の長い巻き毛の房。^(二四)グラで見た姿だ。巻き毛は両耳の前を首のところまで垂れ下がっていて、歩くと誇らかに揺れている。

その後、柵をめぐらせた、丸屋根のある大きな教会堂にたどりついた。身なりのよい男女たちが幾つかの扉から入って行く。ちょうどワルシャワのトウオマツキ通りにあった教会堂に似ている。控えの間にいる礼拝用肩掛けをかけた男性が正式の守衛帽をかぶっていて、それにも守衛と書いてある。ガラス扉が二つあって、そのところまで人でいっぱいだ。しんとして物音ひとつしない。美しい朗々たる合唱歌。この堂内は他のものとはずいぶん異なっている。時折、ベンチの後の混み合ったところから小声がするだけで、中央の通路も人でいっぱいだ。堂内は広い大きな円形になっていて、なんと四階まで本格的なバルコニーのついた階上席があり、本式の劇場のような造りになっている。階上席は、非常に上等の近代的な服を着た婦人が二階に少数いるだけで、空いている。階下では男たちがぎゅうぎゅう詰になっていて、その中には兵士たちもいる。前方には黒衣に身を包み、ボタン付きのキツパをかぶった聖職者たちがいる。真中の人は先唱者だ。素晴らしい見事な歌だ。私はここへ来て、ただ見て帰るだけのつもりだった。というのも、私は、すべての宗派の進歩主義者たちが礼拝と呼んでいるものに対して、嫌悪感を抱いているのだ。けれども、その時、彼が歌い始める。何を歌っているのかは分からないのだが、しかしそ

れは技巧を凝らした非常に洗練された歌だ。トリルといい、装飾のコロラトゥーラといい、素晴らしい。音色をつくるその巧みさはどうだろう。一同は立ったまま耳を澄ましている。それはただの芸術、つまりコンサートホールの芸術ではない。宗教的反芸術というほどには高尚でなくとも、宗教的芸術というものは確かに存在する。そこには、文化的洗練の薄い皮膜におおわれて、祈り、願い、称える感情が表現されている。彼は高貴な異国語で歌っている。今度は守衛が激しく動き、中央の通路を空けている。先唱者が歌いながらラビたちと下りてくる。彼らは赤いビロードに包まれたトーラを持って席を回り、先唱者は歩きながら歓呼と悲嘆の声をあげている。四方から男たちがその赤いビロードに触れ、トーラに口付しようと、手を伸ばしている。

そして私は更に、この都市の営みが生み出すものを探索して歩く。板塀にサーカスや映画、死亡広告のポスターが貼つてある。どこへ行つても「サロメア・ハウスクネヒトヴァ」という名前が目にとまる。

黒旗を垂らした窓がある。ある団体が、前会長の死後、時を経ずして会長を失ったのだ。話によると、高齢の前会長の訃報を聞いた時、若い会長は老人が天国で彼を中傷しないように、急いで後を追ったということだ。

ルィネク広場に沿って、褐色の小馬をつないだ、すごく小さな農家の馬車が行く。たてがみの白い馬も数頭いる。たくさん馬がいて、頭を垂れている。毛は粗く、あばら骨が浮き出ている。大きな囲いがある。以前その中に建物があったのだが、街の真中で真昼間に崩れ落ち、仕事をしていた三五人が即死した。別の一棟では崩壊直前に立ち退いていた。

今日は私の同業のヘンリク・シェンキエヴィチがワルシャワの大聖堂に埋葬される日だ。旧地方議会の建物が両翼を広げて豪壮な姿を見せている。正面に品のない大胆なアレゴリー像が鎮座している。何の役にも立たない円柱

もある。私はこの手の大建築物が嫌いだ。方向を変える。そしてたくさんの子供たちが遊んでいる大きな公園に行きつく。アレゴリー像よりも、私にはこの子たちのおむつ一つの方がいい。たくさん赤ん坊が、日向の乳母車の中で、鳥のように眠っている。

日曜日の早朝、市街のはずれにある丘に上る。このルブリン合同の丘はルブリンの合同を記念して築かれた。一八六三年の蜂起失敗の後、スモルカというオーストリア帝国議会のポーランド人議長が鋤入れをおこなった。それは誇り高きポーランド人が企てた、たくさん「それでもなお」のひとつだった。ルテニア人の農婦たちに出会う。教会に行くところだ。平べったい、温和な、美しい顔立ちで、穏やかな、辛抱強い眼差しをもった、肥沃な平原の人々だ。大きな兵舎のそばを通り、——構内で馬を散歩させている——木々でおおわれた緑の丘の円錐の部分へ。石の階段。茂み。曲り角に石のライオンが座っていて、大きく口を開いている。けれども、悠々と後足の上に座っていて、紋章的なライオンにすぎない。レオを守護したライオンはウクライナ人のために戦ったが、現在では紋章の中の動物で、歴史的なモルタルだ。太陽が低いところに白く見える。市街電車が鈴を鳴らしている。木の梢を見下ろす。全体が急な傾斜になっている。最後に環を描くように螺旋状に上り、強風の中、高い旗竿の下にやっと腰を下ろす。

市街が一带に広がっている。右手は街道となって消えてゆき、左手は丘の向うに見えなくなる。あそこにもまた人間の集落がある。誰かがそれを築き、別の者が破壊し、そして再び築き上げた。それから、トルコ人にワラキア人。それから、タタール人と組んだコサツク、ボグダン・フメリニツキー、トゥハイ・バイ、ワジル・ブトゥーリン。ある時は、タタール人に降伏することを拒否し、下に住む住民全員が貴族となったことがあった。それから、オーストリア人。これで万事休すだった。ポーランド人が反乱を起こしたとき、オーストリア人は彼らの最も優れ

た人々の首を刎ねた。呪わしい覇権争い。発展というのは、人を殴打してあちこちを陥没をつくり、耳を剥ぎ取り、舌を抜き、脳中に煉瓦を打ち込み、義足をくつつけて、体を造るようなものだ。現在では、ポーランド人がウクライナ人といがみあっている。ものすごい風が旗竿に吹きつけている。聖ゲオルク大聖堂、ベルナル教会、旧地方議会の立派な建物が見渡せる。畑は穏やかに穀物を実らせている。市中には美しい階段や老朽化した部屋、かび臭い中庭がある。牛乳売りの女が牛乳缶をカラカラ鳴らしてゆく。

諸聖人⁽³⁾の祝日と死者の祝日。慰霊祭の午後は雨模様の曇天だ。夕暮れ、街の中心部から人々が、長いコハノフスキ通りを大小に群れ連なり、墓地へと下って行く。通りの入口を銃を持った警官が封鎖していて、右手に回らなくてはならない。脇道から新しい人々が長蛇の列に合流してくる。手には花や大きな花輪、もみの枝、蠟燭、小旗を持っている。幾つかの建物の前では商人が、赤い十字架と二本の横帯を縫い付けた白い亜麻布製の小さなバンナーと、ポーランド語の詞文の入った赤白の小旗を持って立っている。つづらおりの通りの曲がり目ごとに警官が立っている。道路がぬかるんでいて、人々は通りの片側から片側へと移動している。今度は乞食だ。壁ぎわに立つ盲人たち。ある曲り目に、盲人と重度の障害者が八人並んでいて、大声をあげて訴えている。それから、左手の空き地には、ぼろぼろの服を着た女や障害者たち二十人が、座ったり、横になったり、うずくまって、一列に並んでいる。頭と胴体だけの人たちは、腕と足の切断部をむき出しにしたまま、小さな手押し車や荷車の上で横になり、義手を前へ伸ばしている。歌っている人、ハーモニカを吹いている人。

街道には黄葉した木が枝を広げていて、散らずに残っている葉が風に揺れている。そこで人の流れが停滞する。市街電車、自動車、辻馬車がたくさん来ている。これが墓地へ入る鉄の門だ。押されるようにして中へ入る。敬虔

な絵画を立てた小机の向うで、修道女がうつろな目をして押し黙っている。小旗を売っている。墓地はうつそうとした素晴らしい広葉樹の森だ。樹冠は見事に繁り、その多くは今も色付いた葉をいっぱいつけている。入口の近くに早くも墓地附属の礼拝堂がそびえたち、階段が通じている。何人かがその階段を上がり、中に点っている蠟燭のところへ向かっている。そこはずいぶん明るく、平和で、温かく、厳かだ。そして、墓塚、礼拝堂、そして樹間にと、いたるところに蠟燭の小さく柔らかな赤い灯がまたたいて、夕闇の押し迫るなか、輝きを放っている。墓の上には黄や茶、赤の落葉がどっさり積もり、その上にぽつぽつ雨が降っている。黒い雨傘が長くテントのように続いて、人々は本道の並木道を進み、脇道へ抜けてゆく。

人々はポーランド語を話している。ひよつとしたらロシア語を話している人もいるかもしれない。大柄な人々、すらりとした若い男女たち。女性たちの多くはこの地方のなまめかしい喪服をまとっていて、額の上に白い縮緬を巻いて、黒く裳裾のように長いベールをつけている。人々はそれぞれの墓の辺に寄り集い、花や蠟燭、ごく小さい縦の木を花壇に植えている。そして、蠟燭を花のようにして芝地に挿し込んでゆく。二本、三本、十本、二十本。穏やかな燦祭。なかには、輪のように幾重にも取りまいて墓もある。墓地は墓碑や彫像、小さな石棺でいっぱいだ。立派なものも質素なものもある。それらの幾つかの墓の前にはやさしい色付きガラスの角灯が燈っている。十字架や壊れた円柱からは、小旗が垂れ下がり、風にひらひらしている。人々は死者のそばで立ち働き、話をしては、新しい飾りを持ってくる。着剣した小銃を持った、若くすらりとした三人の士官学校生が行進してくる。そしてその後を、一人の兵士が大きな縦の枝を運んでいる。儀杖兵として脇道を行進しているのだ。墓地は起伏に富んでいて、木々と豊かな緑で美しく覆われており、うねるような起伏の高いところからも、低いところからも、雨の中を、蠟燭が瞬いている。たくさんの蠟燭が雨で消えてしまうのだが、大きな墓の前には子供たちがいて、またと

もしている。雨の降る中、樹木の間を抜けて、あちこちと歩いていると、歌声が響いてくる。見ると、帽子をとって墓を取りまいている人たちがいて、男声合唱がラテン語の歌を歌っている。「魂の安らかに憩わんことを」だ。雨のなか、梢の下を、歌は慰撫し、宥めるように響いてくる。そのようにしてすべてのものが慰撫し、宥められている。人々は自分の家を飾るように墓を飾り、蠟燭をともし、ともし火に見入り、囁くようにお祈りをして、お互いに語り合い、花を手向けている。そして再び、人々の混み合う中を、警官やずぶぬれの乞食たちのそばを通過して、灯かりのついた通りへ出て、おもむろに帰路についている。

街頭で、ある聡明な男性が、声をひそめて私に次のような話をしてくれる。「国家というのは抑圧者と被抑圧者の均衡のうえに成り立つものです。けれども、ポーランドでは貧困者層が増大しています。ポーランドは民主的な国です。ドイツよりも元来、本質的に民主的です。それはまさにポーランド人に由来するものです。しかしながら、わが国はまだ体制が整ってはいません。商工業の規模がこの国には大きすぎるのです。ロシアというか、ロシアの領有地であった時代には適正だったのです。目下のところ、過大になった規模の縮小が行われています。私たちは東欧の支援を必要としています。現在、ポーランドの国内市場は弱体ですし、国外に対しては製品価格が高すぎるのです。」彼はさらに声をひそめて言う。「ポーランド問題に対する現在の解決が、最終的なものではありえないということを、すでに見通しているポーランド人愛国者たちがいます。政治によって経済的必然性を抑えることはできません。ロシアを不安そうに見守る人たちがいる一方で、期待をこめて見ている人たちもいます。」

お昼に、ちよつと優雅な散歩を楽しむ人々で活気づいたアカデミカ通りを案内してくれたのは、太って仏頂面をした別のレムベルクっ子だ。この人は政治の話題も嫌いではないのだが、むしろ、もう一つ別の話題が好きだ。彼

は私にローマという大きな文士カフェを教え、その後で、街の中心部にある喫茶店ザレフスキに案内してくれた。ここは役者、芸術家、政治家のたぐいがいっぱいいたむろしている。クロークにはちよつとした才能を持った男がいて、携帯品の預かり札を渡さず、札なしで、皆に預けたものを返している。

太ったその男性は大理石の丸テーブルにつくと、小声で次のようなことを話します。「捨てられたからといって、女性がそのことに憤慨するのはいただけません。しかも、あの男をとっても楽しませてあげたのに、楽しんだ後で捨てるなんて、と言うのです。これはいただけません。こんな女性たちは何も分かっていないのです。女性もまったく男性と同じように、恋愛関係と逢瀬を楽しんでいるのです。女性にとつて男性を獲得することはやさしいことではありません。というのもしばらくの間、男性は女性のために自由を放棄するのですから。そんなことを言う女性は恥じるべきです。」——「というത്?」——「騙されただの、楽しむだけ楽しんで捨てられたのです。まったく逆なんです。そもそも男と女がうまくいつている時は、女が男を奪い、楽しんでいるのです。女が男を満喫するのであって、その逆ではないのです。なのに、後になって男を侮辱するのです。」

「何かあったのですか。」と私は同情して探りを入れてみる。

「いえ、いえ。でもこういうことはいつも切実です。ずっと以前からそう思っています。」と彼は唸るように言う。

しばらくすると、彼の顔に明るさがもどる。テーブルにも余裕ができ、彼は近くのテーブルの紳士淑女連を指して、私に教えてくれる。それから、満ち足りた様子で私に囁くように話しかける。

「ご存知のように、もし女性というものがいなければ、この世は堪えがたいでしょう。朝、職場での憂鬱な一日を前にして、けだるく、力なく、ベッドに横になっている時、一人の女性のことを思うと、私はカンフル注射を

打ったか、グラス一杯のワインを飲んだ時のように元気になります。女性がいなければ、私たちは不完全な半身にすぎない、というのには、確かにそれなりの理由があるのです。このことは思いの他、きわめて深刻なことなのです。思うに、私たちは、要するにみんな、男も女も、去勢されているのです。ひとつの動物種について、常に異なった二種類の生物がいる、という考え方もナンセンスです。実際には、両性具有の生物が一種類だけ存在するのです。それが分離するとともに、切断と去勢が行われたのです。性差といい、恋といい、宦官におけるとおなじ欠損の症状なのです。私たちが恋をするのは、去勢されたことからくる病気であり、異常なのです。そして時折、私が彼女と一緒に、彼女が私と一緒にいる時、去勢された宦官状態を脱け出すことができるのです。」

私はコーヒを飲みながら、耳を傾ける。そして、自分が口を利かなくてもよいことに気がつく。彼には何か内に秘めたものがあるのだ。ひよつとすると、私が気に入って、胸中を明かしたがっているのかもしれない。あるいは、溢れる思いを持て余しているのかもしれない。彼は興奮してタバコをふかしながら、周囲のテーブルを探るように見回し、尊大な笑みを浮かべて彼らにその広い背中を向ける。「ある意味で女性たちは正しいのです。彼女たちには男性を嘲る理由があります。隣のテーブルの男たちは女性についてよく知っています。女性は誰でも皆、特別扱いを望むものです。これは無骨者には理解できない、官能的領域の問題です。あなたはどうか考えですか。あなたご自身もそのような観察をなさったことでしょうか。無骨な男というのはあつという間に女性に襲いかかり、一方的に楽しむのです。それで、女性の方はどうでしょう、女性は。なかば機嫌を損ないますが、これは無理ありません。女性はそんな奴のために創られたわけではありません。この手合いは、腹を満たすことしか考えない、肉食獣のようながりがり亡者の類です。私は彼らとは違います。私はどうかというと、私はエゴイストではありません。相手のことを考えます。彼女が幸せでいるなら、天にも昇る気持ちです。彼女を喜ばせるように、いろいろな

ものを私にお授けくださったことを、私は神に感謝しなければなりません。私が女性に奉仕する吟遊詩人だと思いでしょか。私はただ無骨者ではなく、壊れやすい陶磁器店で暴れまわるような真似はしないでください。」

彼は再びタバコをふかすが、それもすぐにやめて、私の方にぴたりと体を寄せてくる。

「女性の官能的部位についてですが、これは人によって異なります。いわゆる生殖器にとらわれてはいけません。これはただの解剖学にすぎないので、乱暴な話です。目の前にいる女性を愛し、思い遣って、初めて、へ生殖器を超越したところで、彼女を発見することができなのです。生殖器のまっただなかにあつてです。人間というのは、自分とはまったく別種の人間を求めるものです。私には今恋人がいるのですが、私は彼女から離れられません。お笑いでしょうが、率直にお話したいと思います。彼女には、解剖学的な意味において、女性的なところはほとんどありません。解剖学的には馬鹿げているかもしれませんが、それでも彼女は官能そのもののような人です。彼女の場合、精神的なものと肉体的なものとの感覚的なものにおいて完璧に結びつき、神秘的合一をなしているのです。私はすっかり彼女のとりこになってしまいました。哲学者たちはこのところを考えようとはしません。彼らはまるつきり事情が分かっていないのです。官能性というのは——このことは断言できますし、長い間の経験があります——哲学者たちが研究するアприオリな必然的判断よりも、神秘的で謎めいています。私はこの謎を彼女のもとの毎身体験しています。私たちの愛は自然の実験のようなものです。私は精神的肉体的に、つまり形而上的にも形而下的にも、両面において惹かれ、彼女から離れられません。役所に行くときに中断するだけで、ずっとそういう状態なのです。あなたがもし彼女をご覧になったら、まさに素晴らしい女性だとおっしゃるでしょう。他の人なら、彼女を自分のものにできれば愉快に違いないと言うでしょう。自分のものにする、というのは品のない表現ですよ。私は、彼女を発見し、彼女において自分を発見するのだと思っています。この女性がそのう

なじや乳房で感じ取るものは、他の女性たちがすべての選りすぐりの器官をもつてしてもなしえないほどのものです。まったく驚くばかりです。ひよっとすると、あなたならこのことを特別な言葉で表現できるかもしれません。でも、私は言葉では言い表せないと思います。それは自然発生の作用に似ています。そうです。私たちは目を交わすだけで、この作用が起こるのです。露わな背中を撫でると、彼女は興奮のあまり死にそうになるほどです。彼女の体は震え始めます。本当なんですよ——彼女は身を離しますが、あえぎながら、再び近づかずにはおれません。磁気力——いや、つまらない、これは新しい感覚の原始的誕生なんです。彼女が他の人たちと一緒に私の前方で座っているとします。すると、私たちの視線はお互いを探しだします。私は彼女を見つめます。他の人たちと勝手なことを話しながら、彼女を数メートルはなれたところからしっかりと熟視するのです。すると、彼女のそばに他の人たちが座って、会話に興じている間も、彼女が興奮してくるのが分かります。彼女の顔は青ざめたかと思うと紅潮し、彼女は椅子で体をしっかりと支え、興奮の絶頂に達します。私には彼女の瞳を見つめ、熟視することによって、それができるのです。そして言葉によって、彼女の感情を豊かな愉悦へと高めることができます。それは彼女の中に潜んでいて、あらゆる場で現れてきます。私たちの間には、そして一般的に男女間には、磁気力以上のものがあり、特別な器官を必要とせず、身体全体をすべて器官に変えてしまうのです。ああ。でも——。あなたはお分りのことと思います。」

彼が非常に興奮しているのが見て取れる。顔色がすっかり青ざめて、震えている。彼は苦しみ、憔悴しているのだ。彼の力にはあまることなのだ。彼女の虜になっているのだろうか。私に話をしたのは、救いを求めていることなのだ。辛辣だった彼の表情は奇妙にこわばってしまった。

旧オーストリア領ポーランドの総督だった上品な老伯爵と、お茶を飲みながら雑談する。彼は所有するイタリア絵画を私に見せてくれ、ポリシェヴィキのために失ってしまったものについて愚痴をこぼす。その後で、大学で国法について講じている彼は、気軽にオッサリネウムの収集品を見ることができるようにと、私に彼の名刺をくれた。これは百年ほど前に、オッサリンスキ伯爵とルボミルスキ侯が作った図書館と美術館だ。そこには人類の壮大な集合的思考の印として、約七〇万冊の蔵書が所蔵されている。かつてカルメリア修道院だったが、その後、軍の倉庫として使われたそれらの部屋を通り抜けながら、私は、人々が一〇マイルの国境線を争い——地球の半分には人がいないのに——、武装して対峙していること、「ヨーロッパ合衆国」という思想はユートピアのように感じられること、それにもかかわらず、精神のほうはずっと昔から相通じていることに思いをめぐらせる。ここにあるのは七〇万冊のその精神の表明だ。ただ、精神には運動組織がなく、いまだ筋肉に影響を与えられないでいる。肉体は精神に順応してはいない。人体はばらばらで、各部分がてんでに働いているのだ。我々はそもそも、人間が集合的存在だという感覚を持っていないのだ。当初、ポーランドの民族主義の高揚とその開放のために用いられたこの建物は、ポーランドに関するあらゆる書物を所蔵している。ガラスをはめた陳列台には非常に古い年代記や印刷物、説教集、多くの素描や銅版画の収集品が並べられている。ルボミルスキ美術館へは若いポーランド人が案内してくれたが、絵画よりも彼の整った顔立ちと、気のきいた上品な物言いに関心を引かれる。そうして、いよいよ方々で耳にしたルブリン合同の絵も目の前にする。それはガラス天井の広間にかかっているのだが、そこは気密性がちゃんと保たれてはおらず、重い雨滴が何秒かおきに天井から絵の前の床に落ちていく。これには大いに興味をそそられる。うまく私のために整えてくれたものだ。私はその広間を歩き、ハンサムなポーランド人を観賞し、歓迎の眼差しで雨滴を眺める。

レムベルクにデドゥシツキという伯爵がいた。伯爵はルイネク広場近くの劇場小路に立派な博物館を建てた。時には、人々の手から武器を取り上げることは良いことだ。そうすれば、外のことも目に入るようになる。そして、伯爵たちも、ふだんは科学者や行楽者たちのものになって自然を発見するのだ。伯爵や男爵、そしてすべての古くからの貴族たちが、自然と向かい合うようになれば素敵だと思う。それは敬虔さと系譜からしてもふさわしいことだ。というのも、自然はたいがい彼らよりもずっと古いからだ。そして、貴族たちはまた、倫理性がにじみでる新しい思考の形式をもたらししてくれるかもしれない。そして、市民によって進められてきた現代の科学は、これまでとは異なる調子をおびてくるかもしれない。

その建物を訪問し、伯爵に最敬礼をする。彼はロックフェラーのようなお金の使い方はしなかった。小切手への署名は完全に精神の行為だった。このポーランドの伯爵はすばらしい事業を成し遂げたのだ。二階への階段を上がり広間に入ると、たくさんの元気いっぱいの少女たちに遭遇する。さもなければ、デドゥシツキ博物館がこれほど魅力的な施設だとは思ふこともなかっただろう。彼女たちは椅子に座ったり、膝を突いたり、屈んだりしている。これら一五歳から一七歳の活発な三十人の少女たちはいろいろな場所に陣取っている。これは思慮深い伯爵のお膳立てによる。というのも、彼は少女たちの前に、動物の剥製が入った陳列箱や陳列棚をたくさん配置していて、少女たちはそれを写生しているのだ。上手に描けているだろうか。私が画用紙を覗こうとして近づくなり、彼女たちはそれを裏返して、「静かにして」というようなことをポーランド語で言う。私は口をつぐむ。しかし、目と耳は別だ。彼女たちはひっきりなしに小声で話し、笑い、耳打ちしている。女性教師が巡回している。監督のフクロウ。そう、小鳥たち、すなわちかわいい子供たちに目配りを怠らない。君たちが剥製にされることはないだろう。我々が死んだら、それで御用済みだ。我々を射止めて博物館に展示するような、我々より高度な種はまだ存在しな

い。超人の時代はまだ来ていない。ここに陳列されているのは敗れた動物の種族門族たちなのだ。背が高くて、脚が長い渉禽類、それからコウノトリのように更に体長があるもの、嘴に膨らみをもつもの。灰色のカモがたくさん群れになって陳列棚にしゃがみ、そのずっと上にはカモメの群れがいる。今度はものすごく巨大なワシたちが鋭い嘴を見せている。なかには鳥というよりも、もつと恐ろしい四足獣のようなものもいて、脚を大きく開いて、筋骨たくましい太ももを見せている。羽を持っているのが信じられないくらいだ。ウの群れ。彼らは妙にぎこちなくて、ミニカンガルーのような姿をしており、翼はひれとなって退化している。ウは体を地面にぴったりとくっつけていて、大きな脚でその体を支えているのだが、よたよた歩きをする時以外は、その脚で跳ねるのだ。攀禽類の一群——今度は生徒たち全員がその前に立って、笑いながら写生したり消したりしているところだ、——ワシミミズクたちだ。鳥はいかにして巣をつくるのか。レムベルクで初めてそれを目にすることができた。小鳥たちはしっかりと茎に枯草やイグサ類を巻きつけて、巣の中に安定した茎を取り込んでいた。巻いた草はほとんど目につかない。小鳥たちはその中で暮らすのだ。神様は動物たちに互いに対する不信感をお授けになった。これは、心を痛めた神様が、ご自身の創造物にお試しになったある種の遅ればせの修正だ。その他の鳥たちは、乾燥したカラス麦の茎の間に、ちゃんとした小さな天幕を作っている。しかしアエギタリス・ペンドリーヌスの振る舞いはどうだろう。この小鳥の生活はまったく奇妙なものだ。自分の体重でたわむような、細くてしなやかな枝に、分厚く密な綿毛の袋を結びつけるのだ。前のほうにゆったりと広い開口部を設けているが、そこからすぐ巣に滑り込むのではなく、まず管がつながっていて、この鳥は通れるが、ほかの鳥は通れないのだ。彼はこの風変わりな装置全体を草で覆っている。このペンドリーヌスは懷疑家で、抜け目のない防衛庁長官というところだ。恐るべき巨大牛バイソン、ヘラジカ、野ウサギでいっぱいの陳列棚のそばを通ってゆく。猫のように小さく、格好も猫のようなウサギが

いるが、中には黒色で太っていて、まさに何かを捕食しようとして身をかがめた、非常に危険な様子をしたものもある。ある展示ケースの中では、毛がふさふさして、小さくほっそりした動物が走っている。プレートにはマッテンとあり、門歯と白い口ひげを見せている。彼らの後ろ側では、ネズミに似たちっちゃな元気のいい子供たちが、身をくねらせて木の幹を上っている。キツネだ。たくさんいる。それから魚。クサリヘビが高い円筒ガラスの中でとぐろを巻いている。そこに開いた卵がある。中ではヘビの子供が育ち、黒い厚みのある頭で殻を突き破って持ち上げようとしている。ヘビは魚や鳥と同じように卵を産む。中間種なのだ。産卵は動物たちが古くから行っている賢いやり方で、卵を埋めたまま放置して避難することができる。卵を抱えたまま体内で孵化するのは、陸生動物のまったく大胆きわまる着想だ。これにより彼らは身軽に動けなくなり、子供たち共々いっぺんに打ち殺され、あるいは餌食とされかねない。しかし、孵化の危険があまりに大きかったため、陸生動物の雌には巣を自分の腹に設けるほかに仕方がなかったのかもしれない。今、我々はふたたび産卵に立ち返るべき時にきているのかもしれない。他の肉食獣はもはや危険ではなく、何の心配もいらない。女性が孵化施設に入り、産卵するというのもなかなかのものではないか。誰のものかはもはや問題にならない。あるいは卵を手元において、自分で孵化器の中に入れるか、もっと良い時期をまって保管するのだ。もちろん卵を保存し、硬貨と一緒に礎石の中に埋め込むなどして、何世紀も後のために残すこともできる。女性は子宮から解放されることになるのだ。

ヘビの骨格は驚くほど精巧にできている。数え切れないほどたくさんの肋骨が脊柱からでて、左右に半円を描いていて、魚の小骨のように細い。それはほっそりした柔軟な管状になっていて、糸のように細い尻尾まで続いている。それから、ヘビ皮の模様といえば、規則的な矩形になっている。ある部屋では、発掘されたサイが陳列されている。黒ずんだ、恐ろしげな姿をしたものが、頭部を低くして、威嚇するように、鎌形の角を突き出している。

それから、金網の向こうには、象の原形であるマンモスの骨格が、黒い皮を見せてそびえ立っている。二階にまで達する高さだ。腰骨は厚く、肩甲帯は幅が成人女性の背丈ほどもある。重々しい弧を描く脊柱は上部で湾曲し、骨の突起が突き立っている。全体としては不恰好だが、煉瓦や切石よりも強度がある骨格構造になっている。サイの脂肪と臓物の塊がホルマリンに浸けられている。どちらも油田地帯の地蠟の中から発掘されたものだ。おそらく二万年くらい前のものだろう。それがここに立っているのだ。このようにして人間はエジプトの王墓をあばき、地球を開発して、原始林の樹木である石炭を掘り出し、それで暖房する。あるいはまた、そこから知識を得る。ここを歩き回り、笑い、絵を描いている我われ人間というのは、なんと抜け目のない動物だろう。我々の骨はここにいる動物たちよりもずっと弱いけれど、巨大な脳を持っているのだ。しかし、わずかな地球の変動でもあれば、我われは地蠟による屈辱を受けることになるだろう。

館内をめぐり歩いていると、気分が晴々として、大いに元気づけられる。私は、いつの日か、これらの動物たちと同じような目にあつても、あるいはまたひよつとして、火炎によつて大氣中に吹き飛ばされてもかまわない。姿が見えようが見えまいが、私は、存在しているし、そうあり続ける。私とはまさに、ここにいるものすべてを照らし出し、彼らは知らないが、彼らすべてによつて、照らし出される自己なのだ。自己が存在する。感じ、促し、駆り立てる自己が。私はすべてのキツネやネズミ、マンモスたちの真実のすがたなのだ。ここはいはば、私の先祖たちの絵が並べられた回廊であり、栄えある殿堂だ。そして、これまでの私の業績なのだ。愛すべきキツネたち、そしてネズミたちよ。お前たちがここを私と共に走り回り、お互いに見交わすことができないのは残念だ。そうすれば、お前たちの自負心も高まるだろうに。お前たちはこの上なく優秀な一族の出だ。見てごらん。我々の時代がくるまでに、何と多くの戦いが行なわれてきたことか。そして、これから何が待ち受けていることか。私、とは、何

と強固で、偉大なのだろう。何と不屈で、強靱で、比類ないのだろう。私は大いに正統なのだ。キツネ、ネズミたちよ、私はお前たちの威厳を損なうようなことはしまい。

劇場広場の木立の向こうにもう一つ、訪れてみたい美術館がある。市立美術館だ。おはよう、アルトゥール・グロットガー。君の小さな水彩画はなんて魅力的なのだろう。君の絵は、昔ベルリンで老ブレッツヒエン^{二九}がやったように、人々の様々な暮らしを愉快に描いている。ほんとうに、多彩で愉快だ。私には時折、人生が雪片のように思われることがある。だが、こともあろうに我々はその中で溺れ死んでしまうのだ。しかし、この美術館の絵画ときたら。次から次へときりが無い。やれやれ、これまでにどのくらいの絵画が描かれたのだろうか。だが、その全部が全部芸術作品という訳でもないはずだ。たとい芸術だとしても、全部見る必要はないだろう。このマティコ^{三〇}という人はあまりにもしばしば大きな題材に振り回されている。彼は鉛筆で自画像を描いている。陰気な表情、ぼさぼさのあご鬚。我々は自分を超えようとする必要はない。与えられているものに感謝しなければならないのだ。館内には美術工芸部門がある。茶碗類を見る。朝、緑のカップでコーヒーを飲むのはとても楽しいものだ。草が高く伸びていて、そこそこには赤い花が見える。それは素晴らしく生の喜びを高めてくれる。太陽のように暖かさを与えてくれる美しい器を手に取り、それに目を澄ます。すると我々は自分自身に、そして更には、神にも近づくのだ。そのようなものに執着し、それを求め、獲得しようとして戦う人がいたとしても、私にはそれが理解できる。生身の人間のために、すなわち、動く手足と頭と髪と五感と感情を持った生きた女性のために戦争を起こしたギリシャの王が、私にはとてもよく理解できる。それはいかなる芸術家にも造ることができない、ただ一人、恐ろしく鈍重で、きわめて老獪な海千山千の自然だけが数百万年の経過の中で、膨大な知識の成果として生み出したものなのだ。自然は次から次へと、なんと多くのものによって人を刺激し、自己を意識させては、自我を目覚めさせ、高めること

か。——私はミルクポットやコーヒーポットのところを通り過ぎる。そうだ、食べ物は大抵だ。そしてその食べ物の装いとなるものが器なのだ。何とはなく、何とはなく、私は幸せな気持ちになった。目にするものすべてを私は味わい楽しんだ。

そのなかでも特に、ここに展示されているものを賛美せずにはおれない。それは低い陳列台の上に置かれた磁器で、ダンスをしている一組の若いカップルが描かれている。二人とも流行の服を着ている。彼女の方はスリットのあるスカートで、羽飾のついた帽子をかぶり、靴はくるぶしの上で結んでいる。彼氏は手を彼女の腰に回し、彼女は踊りながら左手を高く振り上げている。肩はあらわで、ドレスの襟が深く胸の上まで切れ込んでいる。しかしこの磁器の上品な色合い、カップルのつや消しの控えめな色調はどうだ。彼氏の背広は淡いウグイス色で、靴も、後ろへ撫でつけた髪も同じような色調だ。ひだの多い彼女のドレスと羽根飾と靴は明るい肌色だ。二人とも顔色は白みがかっている。彼らは踊りながら右脚を持ち上げ、膝を曲げている。つま先は下に向いている。このような若者たちの姿は非常に優美で、当世風で、上品で、魅力的だ。私は、彼女の方が彼氏より年上で、彼氏が身体は大きいけれど少年であるのを見て狂喜した。それがこのカップルにある特別な親しみやすさを与えている。彼らの足元の高台には花がとても優しくからんでいる。

だが、いったいどうしたことだろうか。私はすっかり魔法にかかってしまった。通りを歩いていると、とある建物の前に足場が組んであって、空にくっきりその桁材を見せている。そして、私は——、梯子とその段に、垂木に、そしてむきだしの鋸状の煉瓦の組積に、魅せられてしまったのだ。足場が、家が、大いなる、この上なく大いなる必然であるかのように。それは自然に成長したというより、むしろ顕現した神秘的な徴なのだ。あたかも不意に太古の世界と視線を交えているかのように。そして不明確なもの、不確実なものは消え去り、すべてが現前し、

開かれていて、内奥まで透けてあらわなのだ。この建物ばかりではない。荷物を持って歩道を歩く人々、がたがた走る馬車、玄関から飛び出てくるダックスフント、通り全体がそうなのだ。私は再び足場に、高い梯子に、垂木に呼び戻される。そして、それらのものを私は凸レンズを通して見るように見る。——それらが透徹した光を放つ中心部であるかのように。

ゆつくりとその狭い通りを歩いてゆくと、大きな方形のマルクト広場に出る。大きな市庁舎の周囲は商人たちでいっぱいだ。広場では噴水が水を吐き出している。既に気持ちは鎮まり始めている。振り返って狭い通りに目をやる。私の周囲の空気が震動する。

そして日が暮れ、教会も一般の建物もすべてが没して見えなくなってしまった。しかし商店や人々にとって夜も昼もない。明るく照明された商店街。それは若い男女や、略帽をかぶりサーベルをおびた将校たちの時間だ。

この頃おいになると、お粗末なミツキエヴィチ記念像近くのマリアの噴水は言葉に表せないほどだ。下では、感じのよい、慎ましやかな噴水が水盤に落下して、物語をつむぎ出している。上にはマリアが立っていて、美しい、控え目な、女性らしい身のこなしで腕を広げている。星の冠をいただいたマリアは、天の元后なのだ。その足元には明かりが灯っており、電球が大きな楕円を描いて、無垢なその姿を取り囲んでいる。愛らしい、表情の豊かな像。

近くに教会がある。名前はわからない。大勢の人たちの後について、明かりのともされた聖堂内に入る。その主柱のひとつには、甲冑を身につけ、髭を生やした老人の像が刻み込まれている。砂時計を持ち、横向きになって寝ている。その時、私のそばの床へ一人の若者がひざまずく。書類鞆を持っていて、店か会社からやって来たのだ。

彼は十字を切つて、祭壇の灯明をじつと見つめている。唇はほとんど動かさない。それから、祈りを終えて、再び十字を切り、そつと足早に夜の街へ出て行く。これはどういうことだったのか。彼は堅固になったのだ。ひよつとするとそれ以上のことが言えるかもしれない。先ほどの彼の行いは主観的なものにすぎない、と誰が言えるだろうか。万有とその一部である人間との本当の関係について、誰が知っているだろうか。全宇宙との繋がりが、彼によつて即座に成就されたのだ。科学はこのことに触れようとはしない。どこにおいても世界の細分化ははなはだし。先ほどのことは何だったのか。それは実践的な智慧なのだ。賢明にも彼はいましたが、後方で聖水盤の水に手を浸した。浄化してくれるものとの接触、親愛なる水と親愛なる手と親愛なる額との触れ合いを彼は選んだ。それで彼はどうなるのか。力を得るのだ。それがどのようにして起こるのか、誰が知るだろうか。

夜も八時を過ぎると、ワルシヤワとは違い、静かだ。「ローエングリン」を市立劇場で観る。しかし一幕だけだ。白鳥が現われる前に、本当に居眠りしてしまった。幕あいには、陽気な音楽批評家である私の案内人と一緒に眠らないように努める。しかし、彼もこらえきれない。私たち二人はオルトルートの夜の陰謀まで我慢できず、朝にトランプットが鳴り響くところで飛び起きる。しかしその後は新鮮な外の空気を吸いたくて我慢できない。歌も演技も素晴らしいのだが、全体としてはひどいものだ。この「聖杯の魔法」はふんぷんと退屈の気を放っている。それは中味のない見せかけ、誇張で、めそめそして薄っぺらなロマン主義だ。ひとつのおとぎ話に会って、それを完膚なきまでに収奪している。どうにも見ていられない。「そなたは決して余に質問してはならぬ。」ラッパによつて布告され、心理学に包まれた見せかけの素朴なおとぎ話、これは近代的な心理学だ。——外へ出ないではおれない。

シユトルツの「道化」のほうがまともだ。彼の名はすぐに忘れられるだろうが。結婚した恋人を変装して訪れ、

何も知らない夫自身に妻のところへ案内してもらおう男という、昔からの筋立てだ。今回、夫が案内するのは医者ではなく、百貨店で自分が妻にプレゼントした手足の動く人形だ。その後、人形は遊び心を誘うように、彼女のベッドの前に立っている。そして今にも遊びが始まる状態だ。その結末については、私はもう思い出せない。だが大仰な身振りはなく、陽気だった。私はずっと恋人を演じた美しく快活な女優に見入っていた。彼女が蝶のように気まぐれで、観客全員に生への欲求を呼びさましてくれたので、そのおかげで作品の出来栄えは良く、音楽も素晴らしかった。

原 注

- (1) アレクサンデル・フレドロ ポーランドの劇作家。一七九三—一八七六
- (2) 今日 一九二四年一〇月二四日。
- (3) 諸聖人の日と死者の日 一月一日と二日。一〇月二九日にデーブリンはドロフビチに出かけ、一〇月三一日に再びレムベルクに帰っている。テキストからはレムベルク滞在が中断されたことは読み取れない。油田地帯への小旅行については「レンベルク」の後に一章（「油田地帯」）が設けられている。
- (4) いろんな 写字生に見落とされていたが、原稿をもとに編者が加えた。

訳 注

- (一) レムベルク ウクライナの東ガリツィア地方における中心的な都市のひとつで、人口約七九万人の古都。レムベルクはドイツ語およびイディッシュ語の呼び名で、ウクライナ語ではリビウ、ポーランド語ではルヴフ、ロシア語ではリヴォフと呼ばれ、オーストリア、ポーランド、ロシアなどに支配を受けてきた歴史を持つ。一九二四年当時はポーランド領であった。
- (二) ガリツィア ポーランド南東部からウクライナ西部にわたる地域をさす歴史的名称。一八世紀末から第一次世界大戦までオーストリア領となり、現在はポーランド領とウクライナ領とに分割されている。一九世紀後半、ガリツィアはウクライナ民族運動の中心地となった。
- (三) レギヨノフ通り オーストリア領時代にはカール・ルードヴィヒ通りというドイツ語名がついていた。
- (四) ピエモント イタリア北西部にあるアルプス山麓地帯。一九世紀におけるイタリア統一運動の中心地となった。
- (五) 会議王国ポーランド ロシア領ポーランドのこと。

- (六) ダニイロ (一二〇一—一六四)。ヴォリニアおよびハリチ公。ハンガリー、リトアニアと巧みに同盟関係を結び、領地に経済的文化的繁栄をもたらせた。一二五三年、教皇特使により王位に就けられる。ヘウムとレムベルクの建設者とされる。息子の名前はレオ(レフ)。
- (七) ギリシャ・カトリック教会 元来は東方教会に属していたが、ローマ・カトリック教会との関係を深め、教皇の權威を認めるようになった、ウクライナおよびベラルーシ西部地域のキリスト教会。教義はカトリック、典礼は東方教会のものに従う。東方帰一教会、あるいは合同(ユニアート)教会とも呼ばれる。
- (八) ポーランド国家元首 一九二一年、レンベルクにおいてウクライナの民族主義者が、当時のポーランド国家元首であったピウスツキ暗殺を企てたが、失敗している。
- (九) ポトツキ アンジェイ・ポトツキ(一八六一—一九〇八)。ポーランド人。暗殺は一九〇八年四月に行われており、デーブリーンが一九一一年としているのは誤りか。
- (一〇) 大戦末期…… 第一次大戦末の一九一八年一〇月、オーストリア軍が崩壊を始めると、独立を目指したウクライナ人は一月一日、レンベルクを占領し、西ウクライナ人民共和国の設立を宣言し、西ウクライナ併合を目指したポーランドとの戦争に発展した。
- (一一) フツリ 西カルパティア山脈の南東部からハンガリー、ブコヴィナにかけて居住するウクライナの山岳民族。
- (一二) イレデント 一般に、隣国の領土内にある或る民族の居住地域を本国に統合しようとする民族統一運動。特にイタリアの民族統一運動。
- (一三) ペトルーシェヴィチ エウゲン・ペトルーシェヴィチ(一八六三—一九四〇)。西ウクライナ人民共和国の総督。
- (一四) グラ グラ・カルヴァリ(カルヴァリの丘)はポーランドにおけるハシディズムの中心地のひとつで、ツァディクのもとへ巡礼が盛んに行なわれた。
- (一五) ヘンリク・シェンキエヴィチ ポーランドの愛国的小説家。第一次大戦中、まじかに迫った祖国独立を見ることなく、スイスに客死。一九二四年、遺体は本国に移され、ワルシャワの聖ヨハネ大聖堂地下に埋葬された。一九〇五年にノーベル文学賞を受賞。(一八四六—一九一六)
- (一六) ボグダン・フリメニツキー 一七世紀に起こったウクライナ・コサックのポーランドに対する反乱独立戦争の指導者。フリメニツキーはクリミア・ハン国と同盟を結び、タタール軍の支援を受けて、一六四八年、ポーランド軍を破った。(一五九五—一六五七)
- (一七) トウハイ・バイ 一六四八年、四〇〇名のタタール軍を率いて、フリメニツキーと共にポーランド軍と戦った。
- (一八) ワジル・ブトゥーリン ロシアの貴族。一六五四年、モスクワの派遣団筆頭としてフリメニツキーとペレヤスラフ条約を結ぶ。翌年、ロシア軍を率いて、ウクライナ軍を支援し、ウクライナからポーランド軍を追い出す助けをした。(一六五六—一六五七)
- (一九) 老ブレッヒエン カール・ブレッヒエン(一七九八—一八四〇)。光と色彩に溢れた絵画によって、印象主義絵画の先駆者

の一人とされる。

(二〇) マテイコ ヤン・マテイコ(一八三七—一九三三)。ポーランドの国民画家。祖国の歴史的な大事件や戦闘を扱った、写実的歴史画を描いた。

(二一) ローエングリン リヒャルト・ヴァーグナーの歌劇。聖杯から派遣された白鳥の騎士ローエングリンは、窮地にあるブラバンド王女を救い、結婚するが、王女が禁じられた質問をしたため、自らの素性を明かして、去ってゆく。

(二二) シュトルツ 不詳。

訳者あとがき

本訳はアルフレート・デーブリーン著『ポーランド旅行』の第五章にあたる「レムベルク」の全訳である。

レムベルクはポーランド国境に近い、ウクライナ北西部の古都で、人口約七九万人をかかえる、ガリツィア地方の中心地の一つである。レムベルクというのはドイツ語およびイディッシュ語の呼び名で、ポーランド語ではルヴフ、ロシア語ではリヴォフ、ウクライナ語ではリビウと呼ぶ。このことからうかがえるように、この都市は長年、ポーランド、オーストリア、ロシア等の支配を受けてきた。デーブリーンが訪れた一九二四年当時は、一九一八年に短命な西ウクライナ人民共和国の首都となった後、ポーランド領になっていた時代である。

古都を散策し、また探索しつつ、デーブリーンは支配を受けるウクライナ人やユダヤ人、そして少し前までは他国の支配に苦しんでいたポーランド人たちの生活に眼を向け、その過去と未来に思いをはせる。

デーブリーンはこれまでもそのようなにして、ポーランドの幾つかの都市を旅してきたが、レムベルクではこれまでとは異なり、単に「眼であり、耳であり、もの言わぬ背景」となって、外界を観察するばかりではなく、内なる世界にあって、論じ、主張しようとする自己を意識する。この自己の新たな発見が、この旅行記後半における隠れたテーマの一つになっているといえる。それはまた、作家としてのデーブリーンの変貌を示すものでもあった。